

解題

詩山堂詩話

一卷

小畑行簡著

小畑行簡、字は居敬、詩山と號す、又た真隱と號す、通稱は、良卓、京都の人にして、江戸に住す、明治八年七月四日歿す。

此書は西國漫遊中に得たる所の詩に就いて、格律風調共に優秀なるものを採りて之を録せり、詩聖堂詩話・五山堂詩話等と略ぼ其の體を同らせり。

詩山堂詩話序

有詩而後有詩話，故古所謂詩話者，詩之自話也，非人之話詩也。曰詩無口也，焉能自話乎？曰古之能詩者，其話精當不易，皆其詩從腹中流出，故已豈詩之自話者，非耶？後世詩未窺古人垣牆，而話則倍蓰之，是無詩而口有話，人之與詩相去絕遠，而其話非襲斯鑿襲者，陳因可厭，如腐粟之在倉，鑿者謬妄百出，如盲者之辨色，詩乃屏默而話獨孤行，甚矣人之話喧，而詩之話闕也。如詩山小畑君，則不然，君刀圭餘暇，能攻詩，其集繡梓行世者若干卷，雖則一支半節，亦其詩所現成，是謂其口卽詩之口，亦可也。君西遊所獲名家之詩，一開其口而評隲之，鑿鑿中綵，彙爲二卷，則是非君之話也，乃其詩之自話也。噫，聽話者苟腹無詩而徒聞諸耳而已，安保不以襲爲確，以鑿爲奇耶？余詩未能滿腹，而與洞然枵腹聞厥話，褒如充耳者，有聞矣。

安可無序。

嘉永庚戌之春二月仲浣

齋藤馨撰

自序

詩話者詩中之清談也、蓋讀此則足以察作者性情、又足審其實迹矣、近來窪天民、池五山、二翁著詩話數卷、膾炙人口、若余所著則土苴、眞足發汗愧然、我日東惜高名大家、殞歿而不顯者、輯漫遊中所得之詩、以罪梨棗、於是乎其實迹難知者、晰然而明矣、其性情難察者、的然而做矣、是亦千里比肩、慰泉客之功德、自代建五重之寶塔耳。

嘉永庚戌之春、南枝北枝齊開、東風西風頗暖。

小畑行簡

單山常書

詩山堂詩話

小畑行簡居敬甫

九州三家之作、學士嘖嘖稱之天下三絕、其一、肥後葦孤山、赤馬關云、長風破浪一帆還、碧海遙廻赤馬關、三十六灘行欲盡、天邊初見鎮西山、其二、筑前龜南冥、鹿兒島云、誰家絲竹散空明、孤客倚樓夢後情、皎月南溟浪不駭、秋高一百二都城、其三、肥後維章輔、姬島云、大海中分玉女峯、峨眉翠黛爲誰容、我將明月遙相贈、影湧瑤臺十二重、品格高古、雄渾流暢、頗足與唐明諸名家相抗衡矣、蓋三傑數十年前、既落泉下、有詩如此、未經刊

九州三家の作は、學士嘖々として之を天下の三絶と稱す、其の一は肥後の葦孤山の赤馬關に云ふ長風浪を破りて一帆還る碧海遙に廻る赤馬が關、三十六灘行、盡きんと欲す、天邊初めて見る鎮西の山と、其の二は筑前の龜南冥の鹿兒島に云ふ誰が家の絲竹ぞ空明に散す、孤客樓に倚る夢後の情、皎月南溟浪駭かす、秋は高し一百二の都城と、其の三は肥後の維章輔の姬島に云ふ大海中分す玉女峯、峨眉翠黛誰が爲めに恋づくる、我、明月を將て遙かに相贈れば、影は湧く瑤臺十二重と、品格高古にして雄渾流暢、頗る唐明の諸名家と相抗衡するに足る、蓋三傑は數十年前既に泉下に落つ、詩ある此の如くにして未だ刊鏤を経ず、故に今録して以て後來の諸雅友

鏤、故今錄以貽後來諸雅友。

備後菅晉帥、字禮卿、號茶山、詩名蔚乎、震爆海内、余前年、西國漫遊、偶訪翁居、譚論今古、傾蓋拊髀焉、翁示詩稿、蘆川卽事云、月色朦朧、波影明、渡船野約客分行、砂禽未穩、蘆中宿、驚起長篙刺水聲、余誦而歎曰、翁之於諸作、風味有力、實非近日詩家之所及、可謂履轍于東坡、放翁、競美于石湖、誠齋也、又今村綽夫過訪、次見贈韻云、儂從輕裝行部來、敲門村巷澗流隈、慚吾日廢涉園課、翻被吏人先問梅、至其俗吏尋問梅花、則暗含蓄乎塵埃、流仙姿之意、而不面折之、此其溫藉淡雅、特使聞者自遺憤懣焉、自君之出矣、作云、自君之出矣、不復開房戶、思君如老荷花、落心

に貼る。

備後の菅晉帥、字は禮卿、茶山と號す、詩名蔚乎として海内に震爆す、余前年西國に漫遊し、偶、翁の居を訪ひて今古を譚論し、傾蓋拊髀す、翁詩稿を示さる、蘆川の卽事に云ふ、月色朦朧として波影明に、渡船野約客分行す、砂禽未だ穩かならず、蘆中の宿、驚起す、長篙水を刺す聲と、余誦して歎じて曰く、翁の諸作に於ける、風味、力あること、實に近日詩家の及ぶ所に非ず、轍を東坡放翁に履み、美を石湖誠齋に競ふと謂ふ可し、又、今村綽夫の過訪して贈らるゝ韻に次して云ふ、儂從輕く行部を裝ひ來り、門を敲く、村巷澗流の隈、慚づ吾が日に、涉園の課を廢して、翻て吏人に先づ梅を問はると、其の俗吏に梅花を尋問せらるといふに至りては、則ち暗に塵埃仙姿を疏すの意を含蓄して、而も面のあたり之を折かず、此れ其の溫藉淡雅、特に聞く者をして自から憤懣を遣れしむ、自君之出の作に云ふ、君が出でしより、復た房戸を開

空苦、戸崎云、四百皆嶮絶、河邊繫短篷、幸餘
 沽酒路、鄰島一條通、柳津云、翠微家斷續、碧
 渚水清澄、火影林閃閃、知侘補網燈、送賴千
 棋遊、芳野云、遠尋春事入皇畿、妙思名花圃、
 麗奇、釋岳峰前千嶺雪、奚奴擔上一囊詩、送
 宮太夫之浪華云、春風二月向京畿、到處韶
 光好賦詩、芳野嵐山花世界、願君遍記作歸
 遺、何言之巧而不穢、又趣之淡而有味也、臨
 別翁揮筆、錄詩爲贈云、島分三萬六千區、棋
 點扶桑東海隅、中有山雲常五色、的知此處
 是方壺、其序云、岩木島醫人來、誕辰壽言、東
 武小畑詩山、之長崎、迂舟路百里、來乞余書、
 蕉詩、余意、有索、每辭、君遠人也、再會難期、
 乃力疾、彊拙、余慰其思、有作云、詩依絕妙名

詩山靈詩話

かず、君を思ふ老荷の如く、花落ちて心空しく苦しむと、
 戸崎に云ふ「四百皆嶮絶し、河邊短篷を繫ぐ、幸に酒を
 沽ふの路を餘して、鄰島一條通す」と、柳津に云ふ「翠微家
 斷續し、碧渚水清澄なり、火影林間に閃けば、知る侘の網
 を補ふ燈なるを」と、賴千棋の芳野に遊ぶを送るに云ふ、
 「遠く春事を尋ねて皇畿に入り、妙思名花麗奇を伺はず、
 釋岳峰前千嶺の雪、奚奴擔上一囊の詩」と、宮太夫の
 浪華に之くを送るに云ふ「春風二月京畿に向ふ、到處
 韶光好し詩を賦するに、芳野嵐山花の世界、願くは君遍
 ねく記して歸遺と作せよ」と、何ぞ言の巧にして識なら
 ず、又た趣の淡にして味あるや、別に臨んで翁筆を揮つ
 て詩を録し贈らる、云ふ「島は分る三萬六千區、棋點す扶
 桑東海の隅、中に山雲ありて常に五色、的に知る此處是
 れ方壺なるを」と、其の序に云ふ「岩木島の醫人來りて誕
 辰の壽言す、東武の小畑詩山長崎に之く、舟路を迂す
 ること百里、余に乞ひて蕉詩を書せしむ、余意、詔
 せり、索むるもの有らば、毎に辭す、君は遠人なり、再會
 期し難し、乃ち疾を力め拙を強ふと、余は其の思を慰め

能聞、洛誦操觚士作鄰、莫謂關東途邈遠、見翁猶勝近邦人、相共傾杯約再會而去、其秋復問翁處、則翁從與余分襟後、患嘔血證、今也殆絕食、惟僅嚙酒漿以繫性命、其序中之語、果成永訣、絕筆作云、月露秋容嫩、風軒暮色敷、少閒離病褥、俄頃隱書格、幽湖泉聲小、遙村火影孤、從茲經幾日、轉惜此宵徂、凡人病至危篤、則必全放心不省人事、而翁之賦詩、精神自若、平仄韻頭不一謬者、深足以感人心、翁又所著黃葉夕陽村舍詩、前篇既行于世、後篇乃京攝書肆爭覓而梓之、共稱金玉之撰也、黃葉夕陽村舍、翁之堂號。

雲州松井、有禪僧稱道光、聽松庵其號也、與茶山翁締交數十年、翁稱曰、大潮以來之一

て作あり、云ふ詩は絶妙に依りて名は能く聞ふ、洛誦操觚の士鄰を作す謂ふ莫れ關東途邈遠と、翁を見るは猶ほ近邦の人に勝る」と、相共に杯を傾け再會を約して去る、其の秋に復た翁の處を問へば、則ち翁は余と襟を分ちし従り後に、嘔血の證を患ひ、今や殆んど絶食し、惟、僅に酒漿を嚙で以て性命を繋ぐと、其の序中の語は果して永訣と成れり、絶筆の作に云ふ、月露秋容嫩く、風軒暮色敷く、少閒病褥を離れ、俄頃書格に隱る、幽湖泉聲小に、遙村火影孤なり、茲より幾日を経ん、轉た惜しむ此の宵の徂くを」と、凡そ人の病、危篤に至れば、則ち必ず全く放心して人事を省みず、而して翁の詩を賦するや、精神自若として、平仄韻頭一も謬らざる者は、深く以て人心を感ぜしむるに足る、翁、又た著す所の黃葉夕陽村舍詩、前篇は既に世に行はれ、後篇は乃ち京攝の書肆争ひ覓めて之を梓にす、共に金玉の撰と稱す、黃葉夕陽村舍とは、翁の堂號なり。

雲州松井に禪僧あり、道光と稱す、聽松庵は、其號なり、茶山翁と交を締ぶること數十年なり、翁稱して曰く、大潮以

名家詠櫻云、自是三春第一芳、杏桃粗俗豈
 爭光、若使唐山生此樹、牡丹不敢儂花王、蓋
 近來諸家詠櫻花者居多、其獲珠玉者幾少、
 詩聖堂詩話、千重積雪無融暖、一簇輕雪易
 碎風、自負曰、不愧古人、然以余觀之、詩佛之
 句、唯一對入妙、其餘不足見耳、若道光、則頓
 覺趣味自有神、余亦嘗賦七律一首云、可許
 花中第一王、偏嫌春雨愛春晴、桃紅俗態元
 成弟、李白凡粧豈競兄、起雷籠霞爭色、欲
 呼無語送香情、唐山若用扶桑辨、不使牡丹
 有僧名、余平日鼻間栩栩曰、扶桑詠櫻者、於
 絕句、則道光、於律詩、則我獲、其粹、末句俱用
 意較同而入妙者、豈非思精之極、鬼神通之
 耶、又道光渡硫黃洋云、帆風美滿海天長、東

詩山堂詩話

來の一名家なりと櫻を詠じて云ふ、自からはれ三春第
 一の芳、杏桃粗俗豈に光を争はんや、若し唐山に此の樹
 を生ぜしめば、牡丹は敢て花王と僧せず」と、蓋近來の諸
 家櫻花を詠する者居多なり、其の珠玉を獲る者は幾ん
 ど少なり、詩聖堂詩話に「千重の積雪暖に融くる無く、一
 簇の輕雪風に碎け易し」と、自負して曰く、古人に愧ぢず
 と、然れども余を以て之を觀るに、詩佛の句、唯だ一對妙
 に入りて、其餘は見るに足らざるのみ、道光の若きは、
 則ち頓に趣味の自から神あるを覺ゆ、余も亦た嘗て七律
 一首を賦して云ふ、可許花中第一の王、偏に春雨を
 嫌ふて春晴を愛す、桃紅は俗態にして元と弟と成る、李
 白は凡粧なり豈に兄に競はんや、雷を起し霞を籠め
 て色を争ふの、余呼ばんと欲して語なし香を送る情、唐
 山若し扶桑を用て辨せば、牡丹をして僧名有らしめず
 と、余平日鼻間栩栩として曰く、扶桑にて櫻を詠するも
 の、絶句に於ては則ち道光、律詩に於ては則ち我、其の粹
 を獲たり、末句俱に用意較、同じくして妙に入るものは、
 豈に思精の極、鬼神之を通するに非ずやと、又た道光硫

望硫黃正淼茫、一睡飛逢三百里、推蓬前島
 是周防、伯州道中云、一路春風旅服輕、前峯
 紅旭上新晴、白櫻花外山如沐、人向黃鶯聲
 裡行、謝玉木氏惠米云、荷君送米勸加殮、使
 我翻忘有待煩、歲暮天寒閭里遠、免擊鐵鉢
 立門門、花瓢云、顏回作飲器、唐球代詩囊、吾
 好異二子、懸壁活群芳、委婉典雅、摹寫妙趣、
 而深入宋元之堂奧、

山水渺邈、風景奇絕、則騷人眩惑、詩情凝縮、
 古今皆盡然、余平日欲脫此窠窟者、年既已
 久、每遇絕勝、必心思刻苦、好詩佳句、弗得弗
 措也、凡賦詩者、置心於一層上、而不被景色
 拘繫、則可也、被景色緊縛、則不可也、古人云、
 上太山而小天下、此其義所存、雖有兩端、詩

黃洋を渡るに云ふ、帆風美滿して海天長く、東硫黃を望
 めば正に淼茫、一睡飛び逢ふ三百里、蓬を推せば前島は
 是れ周防」と、伯州道中に云ふ、一路春風旅服輕し、前峯の
 紅旭、新晴に上る、白櫻花外、山、沐するが如く、人は黃鶯聲
 裡に向つて行くと、玉木氏が米を惠まるゝを謝して云
 ふ、荷ふ君が米を送つて加殮を勸め、我をして翻て煩を
 待つ有るを忘れしむ、歲暮天寒くして閭里遠し、鐵鉢を
 撃けて門々に立つを免ると、花瓢に云ふ、顏回、飲器と作
 し、唐球詩囊に代ふ、吾が好は二子に異り、壁に懸けて群
 芳を活すと、委婉典雅、妙趣を摹寫して深く宋元の堂奥
 に入る。

山水渺邈にして風景奇絶なれば、則ち騷人眩惑し、詩情
 は凝縮す、古今皆な盡く然り、余は平日此の窠窟を脱せ
 ると欲する者年既已に久し、絶勝に遇ふ毎に必らず
 思刻苦して、好詩佳句、得ずんば措かざるなり、凡そ詩を
 賦する者は、心を一層上に置きて、景色に拘繫せられざ
 れば、則ち可なり、景色に緊縛せらるれば、則ち不可なり、
 古人云ふ、太山に上つて天下を小とすと、此れ其の義の
 存する所は兩端ありと雖も、詩魂の遊ぶ所は、此の如く

魂之所游、不如此、則不足、以爲詩人也已。

頼春水有二弟、仲杏坪爲邑宰、季春風業醫、
 藝州人謂之三傑、共有儒雅詩賦之妙、兼善
 書、春水五絶云、竝蒂花何處、近在鴛鴦傍、欲
 采采不得、恐驚起鴛鴦、浣舟口占云、獨聽關
 舟裡、話談各異、偷桑麻、田舍漢、華柳上都人、
 寄家君及萬云、扶老將探勝、芳山久有期、裁
 書寄風便、檢曆計花時、鳩杖翁應健、奚囊弟
 只隨、分明前夜夢、堂上拜、厖眉、杏坪行郡雜
 詩云、邑官講利策、無遺、迂拙我曹何所爲、自
 咲書生餘奮態、半思民苦半思詩、鎮臺遠山
 公有旨、使余縱觀唐山紅毛兩館、唐船主劉
 培原、歡迎置酒、同船陸品三善書、爲余揮筆、
 染書數十紙、皆袖而歸、寔公之賜也、恭賦、一

ならずんば、以て詩人と爲すに足らざるなり。

頼春水に二弟あり、仲は杏坪といひ邑宰と爲り、季は春
 風といひ醫を業とす、藝州の人、之を三傑と謂ふ、共に儒
 雅詩賦の妙あり、兼ねて書を善くす、春水の五絶に云ふ、
 「竝蒂花何れの處ぞ、近く鴛鴦の傍に在り、采らんと欲し
 て採り得ず、恐らくは鴛鴦を驚起せん」と、浣舟口占に云
 ふ、獨り聽く關舟の裡、話談各、偷を異にす、桑麻田舎の
 漢、華柳上都の人と、家君及び萬に寄するに云ふ、老を扶
 けて將に勝を探らんとす、芳山久しく期あり、素を裁し
 て風便に寄せ、曆を檢して花期を計ふ、鳩杖翁應に健な
 るべし、奚囊弟只だ隨ふ、分明なり前夜の夢、堂上に厖眉
 を拜す」と、杏坪の行郡雜詩に云ふ、邑官利を講して策遺
 す無し、迂拙我が曹ら何の爲す所ぞ、自から咲ふ書生の
 奮態を餘すを、半は民苦を思ひ半は詩を思ふ」と、鎮臺遠
 山公旨ありて余をして、唐山紅毛の兩館を縱覽せしむ、唐
 船主劉培原、歡迎して置酒す、同船の陸品三、善く書くす、
 余の爲めに筆を揮ひ、書數十紙を染び、皆な袖にして歸

律奉呈執事云、千棟長樓四面藩、來遊半日別乾坤、異宜竝執東西禮、待譯始通賓主言、每柱新聯懸草隸、滿盤簇釘列鷄豚、風流不管奸闈事、稠戴瓊瑤出館門、謝石崎士齊惠詩畫云、瓊浦文人鬱作圍、風流溫藉似君稀、瘦尖時弄青羊筆、輕暖何求銀鼠衣、詩賊三偷事效答、畫家六法已傳微、相思他日須披翫、好句新圖送我歸、余偶客藝陽、訪杏坪呈一絕云、知君閑地事無煩、笑對盤肴酒一樽、霜夜貪看滿林月、時聞松子落松門、春風夜發廣府赴宮陽云、月落城頭參已橫、蓬間一夢在蓬瀛、須臾假境成真境、紫府丹臺曙色明、杏坪村行云、城外薰風十里餘、午鷄聲近入田間、會集豈童何事業、主翁憑几寫村書、

る、定に公の賜なり、恭しく一律を賦して執事に奉呈す、云ふ千棟の長樓四面の藩、來り遊ぶ半日別乾坤異宜竝に執る東西の禮、待譯始めて通ず賓主の言、每柱の新聯草隸を懸け滿盤の簇釘鷄豚を列す、風流は管せず奸闈の事に、瓊瑤を稠載して館門を出つと、石崎士齊が詩畫を惠まれしを謝するに云ふ、瓊浦の文人鬱として圍を作し、風流溫藉君に似たるは稀なり、瘦尖時に弄す青羊筆、輕暖何ぞ求めん銀鼠衣、詩賊三偷事を答に效はんや、畫家六法正に微を傳ふ、相思は他日須く披翫すべし、好句新圖我歸を送ると、余偶、藝陽に客たり、杏坪を訪ひ、一絶を呈す、云ふ、知る君が閑地事煩なきを、笑て對す盤肴酒一樽、霜夜貪り看る滿林の月、時に聞く松子の松門に落つるを」と、春風の夜、廣府を發して宮陽に赴くに云ふ、月落ちて城頭參已に横はる、蓬間の一夢蓬瀛に在り、須臾の假境眞境と成る、紫府丹臺曙色明なり」と、杏坪の村行に云ふ、城外の薰風十里餘、午鷄聲近く田間に入る、會集の豈童何の事業ぞ、主翁は几に憑りて村書を寫す、

和長川氏見寄韻云、三山碧海渺相思、萬里一聲傳好詩、蜃雨蠻烟碣港外、高飛僊鶴想風姿、風味清雅、品調各適、眞逼乎宋元諸家

下。○按、舊本杏坪詩、賦字作賦、今据春草堂詩草改。

廻文詩以坡老七絕數詩爲最、而其他未見趣意作法悉兼備者、崎陽白龍道人、西勝寺住僧、老齡矍鑠、性耽吟咏、頗得此體矣、春夜云、茶鼎烹閑室、笑談入古今、花前風細細、月裏霧陰陰、鴉宿知林近、鹿鳴思澗深、紗窓對靜夜、覺睡且成吟、冠履韻頭確然備、風境趣味爽然而至、此其難裁、不亦宜哉、今存以廣流傳、余亦嘗賦雨後云、忙中閑處在、險行雨歇昏天日、色晴長水春、川青激激、楊花簌雪亂輕輕、一日訪白龍道人、呈七絕一首云、街

氏の寄せらるる韻を和するに云ふ三山碧海渺として相思ふ、萬里一聲好詩を傳ふ、蜃雨蠻烟碣港の外、高飛の僊鶴風姿を想ふと、風味清雅にして品調各、適ふ眞に宋元諸家の下に逼る。

廻文の詩は坡老の七絶數詩を以て最と爲す、而して其他未だ趣意作法の悉く兼備する者を見ず、崎陽の白龍道人は西勝寺の住僧にして、老齡矍鑠たり、性吟咏に耽り、頗る此の體を得たり、春夜に云ふ茶鼎閑室に烹て、笑談古今に入る、花前風細々、月裏霧陰々、鴉は宿して村の近きを知り、鹿は鳴きて澗の深きを思ふ、紗窓靜夜に對し、睡を覺して且つ吟を成すと、冠履の韻頭確然として備はり、風境趣味爽然として至る、此れ其の裁し難きも亦た宜ならずや、今存して以て流傳を廣む、余も亦た嘗て雨後を賦して云ふ、忙中の閑處は險行に在り、雨は歇んで昏天日色晴る、長水春川青激々、楊花雪を簌して亂れて輕々」と、一日白龍道人を訪ひ、七絶一首を呈して云ふ、街中講を賣りて日西に斜なり、旁午多情家に在ること少

中實講日西斜、旁午多情少、在家堪羨梨園
閑隱士、貪看雪樣滿天花。

龜井道載、號南冥、淹通博雅、詩文太富、學慕
明風、磊砢驚人、七言云、苞樓星下野橋東、數
處寒梅烟月中、未審玄洋鳴徹曉、不爲大雪
定騰風、又云、孤舟蒼海駕鴻蒙、天盡東南一
碧空、風正征帆夜不泊、防長山水月明中、謝
草雄介、惠朝鮮木綿云、藍島曾迎韓使舟、儒
曹法服木綿裘、君今持贈何情況、千載風雲
感舊遊、題東洞翁像云、東洞先生老學醫、經
方祖述漢張機、春秋七十窮逾固、弟子三千
信且疑、萬病有源惟一毒、私言雖好奈公義
英雄心事猶堪思、目睫依然鸞鳳姿、赤城義
士墓下作云、英雄一死羽毛翰、忠勇憐他殲

し、羨むに堪へたり梨園の閑隱士、雪樣滿天の花を貪り
看ると。

龜井道載は南冥と號す、淹通博雅にして詩文太富、
學は明風を慕ひ磊砢、人を驚かす、七言に云ふ「苞樓星下
野橋の東、數處の寒梅烟月中、未だ審にせず玄洋鳴て
曉に徹す、大雪とならずんば定めて騰風ならん」と、又た
云ふ「孤舟蒼海鴻蒙に駕す、天盡きて東南一碧の空風
正ふして征帆夜泊せず、防長の山水月明の中」と、草雄介
の朝鮮木綿を惠まるゝを謝するに云ふ「藍島曾て迎ふ韓
使の舟、儒曹の法服木綿裘、君は今持贈す何の情況ぞ、
千載の風雲舊遊に感ず」と、東洞翁の像に題して云ふ「東
洞先生は老學醫、經方祖述す漢の張機、春秋七十窮して
逾、固く弟子三千信じて且つ疑ふ、萬病に源あり惟だ一
毒、私言好しと雖も公義を奈せん、英雄の心事猶ほ思ふ
に堪へたり、目睫依然たり鸞鳳の姿と、赤城義士墓下の
作に云ふ「英雄一死羽毛翰、忠勇憐む他の園籬を殲す
を幾歲か共に嘗む句踐の膽、半宵争ひ酌む月支の頭、寧

國讎幾歲共嘗句踐膽、半宵爭酌月支頭、寧
 言能敵人神愾、恰好兼休廊廟憂、來弔悲風
 荒艸夕、秋深四十七墳丘、赴瓜生野途中有
 感云、世事縱橫似亂麻、栖栖無日弄年華、江
 城畫暗常多雨、山樹春寒未見花、會慣雲遊
 凌海上、徒教霞想滿天涯、肩輿偶出封疆外、
 興廢關情舊識家、訪草雄介廬云、醉攀垂柳
 繫驂鬪、書館蕭然野水頭、邀我欲傾千斛酒、
 避人誰假一丘幽、朝披蕙帳雲生席、夕浴蘭
 湯月滿樓、別有陽春兼絕唱、芳聲應更菟園
 流、語氣豪爽、境致渾成、真愜明家之口吻矣、
 博多宗福寺主、幻庵上人、龜南冥之弟、青年
 善詩、太宰府雜詠云、池水廻通廟路中、一橋
 如砥二橋虹、朝來滿掬投芳餌、無數金鱗西

詩山堂詩話

ぞ言はんや能く人神の愾に敵すと、恰も好し兼て廊廟
 の憂を休む、來り弔ふ悲風荒草の夕、秋は深し四十七墳
 丘と、瓜生野に赴く途中感あり、云ふ、世事縱橫亂麻に似
 たり栖々日として年華を弄する無し、江城畫は暗くし
 て常に雨多く、山樹春は寒くして未だ花を見ず、會て
 雲遊に慣れて海上を凌ぎ、徒らに霞想をして天涯に滿
 たしむ、肩輿偶まく、出づ封疆の外、興廢情に關す舊識
 の家と、草雄介の廬を訪ふに云ふ、醉ふて垂柳を攀ぢて
 驂鬪を繫ぐ、書館蕭然たり野水の頭、我を邀へて傾けん
 と欲す千斛の酒、人を避けて誰か假さん一丘の幽、朝に
 蕙帳を披いて雲、席に生じ、夕に蘭湯に浴して月、樓に滿
 つ、別に陽春と絶唱とあり、芳聲は應に更に菟園に流る
 べしと、語氣豪爽にして境致渾成なり、真に明家の口吻
 に愜ふ。

博多の宗福寺の主幻庵上人は、龜南冥の弟なり、青年に
 して詩を善くす、太宰府の雜詠に云ふ、池水廻通す廟路
 の中、一橋、砥の如く二橋は虹、朝來滿掬投芳餌を投すれば、

又東春曉云、林扃夜靜伴花眠、夢落江南綠水邊、二十四橋行欲盡、黃鸝喚起曉窓前、余曾遊筑紫之時、某生偶齎此數詩、曰、師之沒也、旣在數年前、子若傳之不朽、則其功德不亦大哉、依提出以錄、又見某家所藏上人初出家圖、席上走筆題云、鷄足詩僧行道踪、緇衣背負一囊斜、俗事胸中無蒂芥、雲山到處是吾家。

龜井昱、字元鳳、號昭陽、明經博史、其著書已等身、余一日訪元鳳、席上呈七絕云、藝苑知子筑前珍、藝苑談經絕比倫、別有芝蘭兼玉樹、滿堂薰得去來人、昭陽竹贊云、竹使人冷、人使竹清、不夜迎月、無風送聲、山陽千古、其人如生、題海棠圖云、染我春風筆、灑之妙畫

無數的金鱗西又東」と、春曉に云ふ「林扃夜は靜にして花を伴ひて眠れば、夢は落つ江南綠水の邊、二十四橋行くくゞ盡さんと欲す、黃鸝喚び起す曉窓の前」と、余曾て筑紫に遊ぶの時に、某生偶まく、此の數詩を齎らして曰く、師の没するや、旣に數年前に在り、子若し之を不朽に傳へば、則ち其の功德も亦た大ならずやと、依りて提出し以て錄す、又た某家に藏する所の上人初めて家を出づるの圖を見て、席上に筆を走らし、題して云ふ「鷄足の詩僧は道を行くこと踪かに、緇衣背に一囊を負ひて斜なり、俗事胸中に蒂芥なし、雲山到處是れ吾が家」と。

龜井昱字は元鳳、昭陽と號す、明經博史なり、其の著書已に身に等し、余は一日元鳳を訪ひ、席上に七絶を呈して云ふ「響を盡して知る子が筑前の珍なるを、藝苑に經を談じて比倫を絶す、別に芝蘭と玉樹と有り、滿堂薰し得たり去來の人」と、昭陽の竹の贊に云ふ「竹は人をして冷ならしめ、人は竹をして清からしむ、夜ならずして月を迎へ、風なくして聲を送り、山陽千古、其人生けるが如し」と、海棠の圖に題して云ふ「我が春風の筆を染めて、之

傍果然花葉動、吹起一堂香、蘭贊云、石無求于蘭、蘭豈求于石、一薰一稷、相視無逆、幽人之心如鏡、物至而適、是以上爲風月之友、下爲山水之客、寄鳳嶺山人云、峨眉天際一峯懸、下有眞人意豁然、是爲形骸同土木、能令丘壑著風煙、詩雖非本色、風趣自有明人之響、璧焉、其弟泰壯者、業儒醫、寓太宰府街中、余偶訪訊、上下議論、日以繼燈、泰壯席上賦五絕云、關東雖遼遠、文字有朋來、此日眞奇會、古今衝口陳、又讀西行和歌作云、莫對愁時月、何爲又泣人、袖襟珠耐掬、自怪淚痕頻、造詣拔凡、聲調悉備、余亦席上呈一詩云、數米爲炊、簡髮梳、怪君功業不終髮、願將鵬鳥圖南意、奮出名聲上太虛。

を妙囊の傍に瀆ぐ、果然花葉動き、吹き起す一堂の香と、蘭の贊に云ふ「石は蘭に求むること無し、蘭豈に石に求めんや、一薰一稷相視無逆」と無し、幽人の心は鏡の如く、物至りて適す、是を以て上は風月の友と爲り、下は山水の客と爲る」と、鳳嶺山人に寄せて云ふ「峨眉天際一峯懸る、下に眞人あり意豁然たり、是れ形骸の土木に同じきが爲めに、能く丘壑をして風煙を著けしむ」と、詩は本色に非ずと雖も、風趣は自から明人の響璧有り、其の弟泰壯は儒醫を業として太宰府の街中に寓す、余偶まゝ訪訊して議論を上下し、日に以て燈を繼ぎたり、泰壯は席上に五絶を賦して云ふ「關東は遼遠なりと雖も、文字朋ありて來る、此の日眞に奇會なり、古今口を衝いて陳す」と、又た西行の和歌を讀むの作に云ふ「愁時の月に對する莫くんば、何爲れぞ又た人を泣かしめん、袖襟珠、掬するに堪へたり、自から怪しむ淚痕の頻りなるを」と、造詣凡に抜け、聲調悉く備はる、余も亦た席上に一詩を呈して云ふ「米を數へて炊を爲し髮を簡んで梳る、怪しむ君が功業譽を終へず、願はくば鵬鳥圖南の意を將つて、名聲を奮出して太虛に上らん」とを」と。

文字華美、則情意或無餘蘊、情意餘蘊、則文字或無華美、是近時通癢、余偶讀宋三家集、其詩各有得失焉、石湖誠齋專懲華美、或鮮餘蘊、放翁壹事餘蘊、或鮮華美、能適其權、而品調更進一層者、獨以東坡翁爲然也、今時詩客、徒尊崇東坡及三家、如拱璧而未、知有彼此軒輊、故其言多繡錦、字或綴玉、喻之妖嬈、巧笑求售、稍無情實、若夫淑女窈窕、假粧美豔、則始可與議已。

瓊浦長川氏號醉月、學詩吉村迂齋、與余屢有風月之談、題遠山公詩卷後云、仙家詩卷落人間、險罷胸中不等閑、筆底收來海外勝、蝦夷絕島朝鮮山、寄示余作云、問余何處結茅廬、答謂西山三里餘、祇樹林過超一徑、溪

文字華美なれば、則ち情意或は餘蘊なし、情意餘蘊あれば、則ち文字或は華美なし、是れ近時の通癢なり、余偶まゝ宋の三家の集を讀みしに、其の詩は各、得失あり、石湖誠齋は專ば華美を懲めて、或は餘蘊鮮なく、放翁は壹に餘蘊を主として、或は華美鮮し、能く其の權に適して、品調更に一層を進む者は、獨り東坡翁を以て然りと爲す、今時の詩客は、徒らに東坡及び三家を尊崇すること、拱璧の如くにして、未だ彼此軒輊あるを知らず、故に其の言多くは錦を繡し、字或は玉を綴る、之を妖嬈に喩ふに、巧笑して售らんことを求むるも、稍情實なし、若し夫れ淑女の窈窕にして、假に美豔を粧はば、則ち始めて與に議すべきのみ。

瓊浦の長川氏は、醉月と號す、詩を吉村迂齋に學び、余と屢、風月の談あり、遠山公詩卷の後に題して云ふ、仙家の詩卷人間に落つ、險罷んで胸中等閑ならず、筆底收め來る海外の勝、蝦夷絶島朝鮮の山と、余に寄示する作に云ふ、余に問ふ何れの處にか茅廬を結ぶと、答へて謂ふ西山三里餘、祇樹林過ぎて一徑を超へ、溪橋渡り盡して吾

橋渡盡有吾居、境致清幽、殊出新裁、余寄一絕云、天爵偏嫌人爵煩、卜居數歲在山村、山村卻有秋來富、樹樹錦堆貧、士門頗漏醉月之幽事、醉月又示詩曰、此是先師迂齋翁之作也、迂齋、正隆之號、人能知其名、瓊江舟行云、三十六灣灣接灣、扶桑西盡白雲間、青天萬里非無國、一髮晴分吳越山、長相思一曲、寄清人黃定甫云、水盈盈、思盈盈、人在仙樓、遙寄情、唯聞龍笛聲、秋雲清、秋雲清、對此江天夜月明、爲君睡不成、又長相思一曲、送志五城歸仙臺云、雲漫漫、水漫漫、地濶天長來、往難、與君今會言、乍交歡、乍失歡、自謂蓬萊降謫仙、無心滯世間、清趣悠遠、品調特隆、蓋填詩之盛、昉于迂齋翁、嘗聞蒼茶山翁、亦欲

詩山堂詩話

が居あり」と境致清幽殊に新裁を出だす、余、一絶を寄せて云ふ、天爵は偏に嫌ふ人爵の煩を、居を卜して數歲山村に在り、山村卻て秋來の富あり、樹々錦は堆す貧士の門と、頗る醉月の幽事を漏らす、醉月又た詩を示して曰く、此れは是れ先師迂齋翁の作なりと、迂齋は正隆の號にして、人能く其の名を知る、瓊江舟行に云ふ三十六灣灣灣に接す、扶桑西に盡く白雲の間、青天萬里國なきに非ず、一髮晴は分る吳越の山と、長相思の一曲清人黃定甫に寄するに云ふ、水は盈盈、思は盈盈、人は仙樓に在りて遙かに情を寄す、唯だ聞か龍笛の聲、秋雲清く、秋雲清し、此の江天夜月明に對して、君が爲めに睡成らずと、又長相思一曲、志五城か仙臺に歸るを送るに云ふ、雲は漫々水は漫々、地濶く天長く來往難し、君と今言を會す、乍ち交歡し乍ち失歡す、自から謂ふ蓬萊降謫の仙、無心世間に滯ると、清趣悠遠にして、品調特に隆し、蓋、填詩の盛は、迂齋翁に昉る、嘗て聞く蒼茶山翁も亦た此の諸作

「閱此諸作、名實之賓、信哉。」

菅堯輔、茶山翁之義子、號焦鄰、余嘗謁見、論文談詩、頗見其雄才、臨別、寄示近作、春夜讀書云、夜短三更課未了、伊吾聲散落花風、過窓月色澹無影、一穗書燈香霧中、春水云、河豚隨日上漁舫、錦浪春暄兩岸桃、却恐明朝難下網、張江雪水晚翻濤、春月云、春梢月出淡、清暉甚事飄然雪撲衣、影透枝間香霧散、栖禽驚起踏花飛、春山云、尋春幾伴入崢嶸、曾是蕭條狐兔運、煙靄籠花花不見、香風隔谷遞、歌聲嫺雅縝密、詞氣溫藉、其居處常習與、性成、信哉。

余向遊藝陽、在山田文貞家、而講義詩書、某日與豐偉元、岡嘉輔、阪井楨、俱會、横田正虎

を聞せんと欲すと、名は實の賓と、信なるかな。

菅堯輔は、茶山翁の義子にして、焦鄰と號す、余嘗て謁見して、文を論じ詩を談じ、頗る其の雄才を見る、別に臨んで近作を寄せり、春夜讀書に云ふ、夜短くして三更課未だ了らず、伊吾の聲は散ず落花の風、窓を過ぐるの月色は澹として影なく、一穗の書燈香霧の中と、春水に云ふ、河豚日に随つて漁舫に上る、錦浪春暄かなり兩岸の桃、卻て恐る明朝網を下し難きを、江に漲るの雪水晚に濤を翻すと、春月に云ふ、春梢月出でて清暉淡し、甚に事ぞ飄然として雪衣を撲つ、影は枝間に透りて香霧散じ、栖禽驚起し花を踏んで飛ぶと、春山に云ふ、春を尋ねて幾伴か崢嶸に入る、曾是蕭條狐兔の運、煙靄花を籠めて花見えす、香風谷を隔てて歌聲を遞ふと、嫺雅縝密、詞氣溫藉なり、其の居處常に習ひ性と成ると、信なるかな。

余向きに藝陽に遊んで山田文貞の家に在り、而して詩書を講義す、某の日豊偉元、岡嘉輔、阪井楨と俱に横田正虎

之曠哈樓、横田氏世所謂大石良雄之後胤也、各自有隨題隨韻之詩賦、余詩先成、云一天一握賞多哉、舌吐錦言、唵幾回、仙客問余君飲否、髻童笑指未傾杯、偉元賦一絕云、一道涼風送夜潮、月明二十四華橋、橋頭如玉誰家客、吹徹仙人紫鳳笙、嘉輔詠竹云、濯濯傲冬雪、青青聳夏天、唯依君子愛、不覓俗人憐、阪井積山寺納涼古詩云、指點遠公三咲亭、香爐高處佛燈青、石門壁立一千仞、瀑布飛流注翠屏、登路盡處虎溪上、隔水松門霧半肩、童子出汲井華去、老僧八十誦殘經、幡幢不動篆煙起、白鹿青鸞眠且聽、翻然引我坐禪榻、片石孤雲苔滿庭、翠樹陰陰午雨後、白蓮花搖晚風馨、上頭月出山寂寞、唯有洞

詩山堂詩話

曠哈樓に會す、横田氏は世に謂はゆる大石良雄の後胤なり、各自に隨題隨意の詩賦あり、余の詩先づ成る、云ふ「一天一握賞多きかな、舌に錦言を吐て唵する幾回ぞ、仙客余に問ふ君は飲むや否やと、髻童笑て指す未だ傾けざるの杯を」と、偉元、一絶を賦して云ふ、一道の涼風、夜潮を送る、月は明かなり、二十四華橋、橋頭玉の如き誰か家の客ぞ、吹き徹す仙人の紫鳳笙」と、嘉輔、竹を詠して云ふ、濯々として冬、雪に傲り、青々として夏、天に聳ゆ、唯だ君子の愛に依り、俗人の憐を覓めず」と、阪井積の山寺納涼の古詩に云ふ、指點す遠公の三咲亭、香爐高き處に佛燈青し、石門壁立す一千仞、瀑布飛流して翠屏に注ぐ、登々踏は盡く虎溪の上、水を隔つる松門霧半は肩す、童子出でて井華を汲んで去り、老僧八十殘經を誦す、幡幢動かす篆煙起り、白鹿青鸞眠り且つ聽く、翻然我を引きて禪榻に坐せしめ、片石孤雲苔滿庭に滿つ、翠樹陰々たり午雨の後、白蓮花搖いて晚風馨はし、上頭月出でて山寂寞たり、唯だ洞泉ありて響き冷々、塵縁本と無心に由て

泉響冷冷、塵緣本由無心絕、熱惱初開法語、
醒緇衲縫掖寧論異、從來神友外其形、又江
樓納涼云、結宇莫背山、起樓須枕江、江上樓
高百餘尺、青山滄海竝在窓、夏天偏宜夜、夜
深絕粉噓、月出弄金波、潮來沒石缸、上有誦
詩之高客、下有載妓之歌艘、一片江雲不飛
度、鷗鷺鷺臥幾雙雙、樓上舟中坐自得、新翻
古調不同腔、五更月落長江靜、隔水鐘聲斷
續撞、興味酣闌、坐客酩酊、共攜手而歸、今併
錄爲奇會之話種。

山口氏、藝陽之學士、昆季共有清才、昆曰恕
輔、季曰清輔、恕輔躬撰宮隄記、使清輔揮筆、
臨別贈之於余、洵案頭雙壁也、清輔亦贈七
絕云、尋翫地理漢張翥、卻勝妄誇司馬遷、知

絶え、熱惱初めて法語を聞きて醒む緇衲縫掖寧ぞ異を
論ぜん、從來の神友は其の形を外にすと、又た、江樓の
納涼に云ふ字を結ぶは山に背く莫れ、樓を起すは須く
江に枕むべし、江上樓は高し百餘尺、青山滄海竝に窓に
在り、夏天は偏に夜に宜し、夜深ふして粉噓を絶つ、月出
でて金波を弄し、潮來りて石缸を没す、上に詩を誦する
の高客あり、下に妓を載するの歌艘あり、一片の江雲飛
び度らず、鷗は鷺き鷺は臥して幾雙々、樓上舟中坐して自
得す、新翻古調腔を同うせず、五更月落ちて長江靜なり、
水を隔つる鐘聲斷續して撞くと、興味酣闌坐客酩酊し、
共に手を携へて歸る、今併せ錄して奇會の話種と爲す。

山口氏は藝陽の學士なり、昆季共に清才あり、昆を恕輔
といひ、季を清輔と曰ふ、恕輔躬から宮隄の記を撰し、清
輔をして筆を揮はしめ、別に臨みて之を余に贈る、洵に
案頭の雙壁なり、清輔も亦た七絶を贈る、云ふ地理を尋
翫す漢の張翥、卻て勝る妄誇の司馬遷に、知る子か多年

子多年修國史、眼中山水忽成篇、余和韻云、
無限離情無限天、滿堂明月酒開筵、明日縱
分襟手去、雁鴻時也寄詩篇、清輔兩日過野
渡、漁鄉十里水風腥、列次松扉鄰竹扇、堤
柳斜邊立待渡、一篷暮雨滿江暝、忽輔見示
舊作、云、夫耕婦織長兒孫、投種育蠶亦事煩、
詞客不知農務苦、行行謾問有花村、凡雅人
風逸雖似不知農苦、卻覺其不然、且風味清
妙稍堪洗塵腸、錄以供後日之遺忘。

西國出南冥之塾、而早蜚名譽者、江芥洲、原
古處、廣元簡、其餘無聞焉、芥洲古處二士、既
已下世、獨元簡建旗於豐後、專唱歐陽之說、
以導弟子、其徒在門者、已滿數百人、云、芥洲
有作、七絕云、誰言日本九夷濱、日出之邦月

國史を修して、眼中の山水忽ち篇を成すことを」と、余は
韻に和して云ふ「限り無きの離情限り無きの天、滿堂の
明月酒に筵を開く、明日縱ひ襟手を分ち去るも、雁鴻時
に也た詩篇を寄せよ」と、清輔の兩日野渡を過ぐるに云
ふ「漁鄉十里水風腥し、列次す松扉竹扇に鄰る堤柳斜な
る邊に立ちて渡を待つ、一篷の暮雨江に滿ちて暝し」と、
忽輔は舊作を示さる。云ふ夫は耕し婦は織りて兒孫を
長す種を投じ蠶を育す事亦た煩はし、詞客は知らず農
務の苦を、行行謾に問ふ花有るの村」と、凡そ雅人の風逸
農苦を知らざるに似たりと雖も、卻て其の然らざるを覺
ゆ、且つ風味清妙、稍や塵腸を洗ふに堪へたり、錄して以
て後日の遺忘に供ふ。

西國の南冥の塾に出でて、早く名譽を蜚ばす者は、江芥
洲、原古處、廣元簡あり、其餘は聞ゆるなし、芥洲古處の二
士は既に下世す、獨り元簡は旗を豐後に建て、專らばら
歐陽の説を唱へて、以て弟子を導びく、其の徒の門に在
るもの已に數百人に滿つと云ふ、芥洲作あり、七絶に云ふ
「誰か言ふ日本は九夷の濱と、日出の邦月も亦た新なり、

亦新、三五夜中新月色、餘光纔假大唐人、古處寄龜雲來云、五更三點著朝衣、古處城高雪掩扉、何似雲來閑隱士、訪花尋柳弄春輝、元簡七絕云、百派分流西又東、須知洙泗一源同、寄言縫掖諸君子、莫做當年洛蜀風、初春雨中作云、鳥未遷喬花未開、驕頭殘雪尙成堆、誰知東帝回春處、卻自空濛蕭瑟來、筑前道上云、野店蒹葭架、驛亭枳殼牆、有人來馳擔、言語似吾鄉、余亦嘗讀元簡所著遠思樓集有感、遙寄一絕云、遠思樓集妙詩章、趣自無鄉入有鄉、知是其人宛如玉、空勞遐想坐書堂、元簡有弟名謙字吉甫號旭莊又號梅墩、性專嗜詩賦、廉塾逢添拙堂七言古詩云、千里枉路訪吾宅、記得花溪溪上橋、共步

三五夜中新月の色、餘光纔かに假す大唐の人」と古處は龜雲來に寄せて云ふ「五更三點朝衣を著し、古處城高くして雪扉を掩ふ、何ぞ似ん雲來の閑隱士、花を訪ひ柳を尋ねて春輝を弄するに」と、元簡の七絶に云ふ「百派分流す西又東、須らく知るべし洙泗一源の同じきを言を寄す縫掖の諸君子、當年洛蜀の風に倣ふこと莫れ」と、初春雨中の作に云ふ「鳥は未だ喬に遷らず花は未だ開かず、驕頭の殘雪尙ほ堆を成す、誰か知らん東帝春を回す處、卻て空濛蕭瑟より來る」と、筑前道上に云ふ「野店蒹葭の架、驛亭枳殼の牆、人あり來りて擔を弛ふ、言語、吾郷に似たり」と、余も亦た嘗て元簡の著す所の遠思樓集を讀みて感あり、遙かに一絶を寄せて云ふ「遠思樓集の妙詩章、趣は無郷より有郷に入る、知る是れ其の人宛として玉の如し、空しく遐想を勞して書堂に坐す」と、元簡に弟あり、名は謙字は吉甫、旭莊と號し、又た梅墩と號す、性專ばら詩賦を嗜む、廉塾にて添拙堂に逢ふ七言古詩に云ふ「千里路を枉けて吾が宅を訪ふ、記し得たり花溪々上の橋、共に歩す月明江碧の夕、一たび君が火

月明江碧夕、一自君向火國行、冥鴻杳然無蹤跡、今年我作東遊人、飄然來著神邊驛、何圖君在菅子家、邂逅相遇手加額、此行幾處閱青衿、曾無一箇有風格、若微君來在此中、我與亦應太蕭索、縱經千山萬壑間、槩木僵草互狼藉、忽然雪消斷橋邊、一枝梅花橫絕壁、契濶談長忘夜深、西窓落月殘香白、亂帙堆卷小室中、不解衣帶眠君席、夢返故鄉步花溪、復弄月明與江碧、寄題辻氏豁然樓、五律云、四方多少景、收入一樓間、暮色鴉邊樹、秋天鴈外山、夢隨流水遠、心逐岫雲閒、應有瀛州客、時時此往還、除夜作云、天涯歲月又崢嶸、阪府江都居屢更、雖慣東西踪跡徒、亦逢彼此友朋情、愁如川至斷時少、儼似影隨

國に向つて行きしより、冥鴻杳然として蹤跡なし、今年我れ東遊の人と作り、飄然として來り著く神邊驛、何ぞ圖らん君は菅子の家に在るを邂逅に相遇ふて手を額に加ふ、此の行幾處か青衿を關するに、曾て一箇の風格有るなし、若し君の來りて此の中に在る微りせば、我が興も亦た應きに太た蕭索なるべし、縱へ千山萬壑の間を經るも、槩木僵草互に狼藉たり、忽然雪消す斷橋の邊、一枝の梅花絕壁に横はる契濶談長くして夜の深きを忘れ、西窓落月香の白きを殘す、亂帙堆卷小室の中、衣帶を解かず君が席に眠る、夢に故郷に返りて花溪に歩し、復た月明と江碧とを弄すと、辻氏の豁然樓に寄題する五律に云ふ、四方多少の景收めて一樓の間に入る、暮色鴉邊の樹、秋天鴈外の山、夢は流水に隨ひて遠く、心は岫雲を逐ふて閑なり、應に瀛洲の客ありて、時々此に往還すべし」と、除夜の作に云ふ、天涯歲月又た崢嶸、阪府江都居屢更、更ら、東西踪跡の徒に慣ると雖も、亦た彼此友朋の情に違ふ、愁は川の至るが如く斷

行處生、欲向古人論我意、五更猶對短燈檠、梅墩又嘗遊荏戶之時、偶訪余居、余席上呈一絕云、唵笳度水超山巒、不厭風餐露宿難、聞得西邦千里野、執詩牛耳在盟壇、梅墩和余韻云、詩興唯知多逸宕、世途何問有艱難、柴門春映桃花水、漁棹秋過杏樹壇、此皆宛然唐明之詞響也。

余輩平生每賦詩、必極鍛鍊、全詩將就而其力之屯束、纔在二字間、其思之不得、熟思移時、幸得填嵌、則喜快交集、亦較之古人詩、則疵瑕累出、患其不能進步、欲燒筆硯、束之高閣、卻過一二日、則興味復發、其煉之如故、力亦窮如前、而始得成佳詩也、余年已過知命、而纏縛于茲、不知幾回嘗訪茶山翁、請閱

ゆる時少く、俄は影の隨ふに似て行く處に生ず、古人に向つて我が意を論せんと欲す、五更猶對す短燈檠と、梅墩又た嘗て荏戸に遊ぶの時、偶まゝ余の居を訪ふ、余は席上に一絶を呈して云ふ、唵笳水を度り山巒を越え、厭はず風餐露宿の難きを、聞き得たり西邦千里の野、詩の牛耳を執り盟壇に在ることをと、梅墩は余の韻に和して云ふ、詩興唯だ知る逸宕多きことを、世途何ぞ問はん艱難有るを、柴門春は映す桃花の水、漁棹秋は過ぐ杏樹の壇と、此れ皆な宛然たる唐明の詞響なり。

余輩、生平詩を賦する毎に、必らず極めて鍛鍊す、全詩將に就らんとして、其の力の屯束、纔かに二字の間に在り、其の之を思ふて得ず、熟思時を移して、幸に填嵌を得れば、則ち喜快交集、亦た之を古人の詩に較れば、則ち疵瑕累出して、其の歩を進むること能はざるを患ひ、筆硯を燒かんと欲し、之を高閣に束ぬ、卻て一二日を過ぐれば、則ち興味復た發す、其の之を煉ること故の如く、力も亦た窮すること前の如し、而して始めて佳詩を成すを得たり、余は年已に知命を過ぎ、而して茲に纏縛すること幾回なるを知らず、嘗て茶山翁を訪ひ、其の唵稿を閱せんことを請ふ、翁敢て可かず、強ひて之を檢すれば、

其陰稿翁不敢可強而檢之、每詩字句間、雖黃塗竄難一分明、詰問切思、得誦若干首、於是知得力於窮一字、吾人無相異、孟子所謂先苦其心志者、欺我乎、果不我欺也。

崎陽譯司、太田氏通稱仁輔、號春耕、性嗜詩、最長咏物、客年與余結水魚之交、時時訂鷗盟、其子春山、數訪余寓居、而質問左氏傳、余亦代受以小說家之言、春耕新月云、遙天雲散盡、晴色正黃昏、素女未開鏡、爲誰劃爪痕、冬夜廻文云、旁牖圍梅竹、輝輝月色寒、訪尋無客過、詩賦坐宵殘、子規啼云、雨歇風收巫峽分、子規啼處月離雲、方知天際孤舟客、十二峰前停棹聞、聖人盤云、盤中指斗獨橫鋒、彫鑿支干護九重、磁石氣靈衝赤羽、玻璃影

神山堂詩話

每詩字句の間、雖黃塗竄し一も分明なり難し、詰問切思して若干首を誦するを得たり、是に於て知る力を窮の一字に得ること、吾人相異なる無きを、孟子の謂はゆる先づ其の心志を苦しむといふ者、我を欺かんや、果して我を欺かざるなり。

崎陽の譯司太田氏通稱は仁輔、春耕と號す、性詩を嗜み、最も咏物に長ず、客年余と水魚の交を結び、時々鷗盟を訂す、其の子春山は數、余が寓居を訪ひて左氏傳を質問す、余も亦た代へ受くるに小説家の言を以てす、春耕の新月に云ふ、遙天雲散じ盡し、晴色正に黃昏なり、素女未だ鏡を開かず、誰が爲めにか爪痕を劃る、冬夜廻文に云ふ、牖に旁ふて梅竹を圍し、輝々として月色寒し、訪尋客の過ぐる無し、詩賦宵の殘するに坐す、子規啼に云ふ、雨は歇み風は收りて巫峽分る、子規啼く處、月、雲を離る、方に知る天際孤舟の客、十二峰前棹を停めて聞かん、と聖人盤に云ふ、盤中斗を指して獨り鋒を横たへ、彫鑿支干九重を護す、磁石氣靈にして赤羽を衝き、玻璃影冷

冷動蒼龍、揚帆先按途邪正、築室預占方吉
 凶、尊爲被稱天聖號、大哉規矩屬中庸、公平
 云、雙柱亘衝鈎掛盤、毫銖錢兩兌平看、握來
 齊疊銀花燦、鎚擊宛聞金石彈、富貴筐方排、
 潤屋、鞦韆繩直上清壇、豆腐云磨豆加鹽煉
 比酥、筐中截出象方珠、寒宵添火雲翻鼎、暑
 月滴泉雪疊盂、焦製龜文齋市店、油煎金色
 貯僧厨、羹湯一飽無魚美、沒齒衰翁好噉無、
 紙帳云、清清皎皎四顧門、曉色常迷晝與昏、
 滿目無邊雲世界、一塵不染雪乾坤、寒氈驟
 暖回春氣、倦枕照過明月痕、風致仍思林下
 臥、羅浮夢返冷冰魂、咏象云、明王慎德遠人
 臻、異獸由來非所珍、旋出西洋供禹貢、今過
 東土戴堯仁、圓蹄剪鐵蹄還去、長鼻欺蛇卷、

にして蒼龍動く、帆を揚げて先づ按す途の邪正、室を築
 きて預め占ふ方の吉凶、尊きは天聖の號を稱せらるゝが
 爲めに、大なるかな規矩中庸に屬すと、公平に云ふ雙柱
 亘衝鈎盤を掛け毫銖錢兩兌平看す、握り來りて齊し
 く疊む銀花の燦、鎚撃宛も聞く金石の彈、富貴筐方にし
 て潤屋を排し、鞦韆繩直にして清壇に上ると、豆腐に云
 ふ磨豆鹽を加へて煉、酥に比す、筐中截出して方珠に象
 る、寒宵火を添へて雲、鼎に翻り、暑月泉を滴て雪、盂に疊
 む、焦製の龜文、市店に齋らし、油煎の金色、僧厨に貯ふ羹
 湯一飽魚美なきも、齒を没するまで衰翁好し噉するや
 無や、紙帳に云ふ清清皎々たり四顧の門、曉色常に迷ふ
 晝と昏と、滿目邊なく雲の世界、一塵染まらず雪の乾坤、寒
 氈驟に暖かなり回春の氣、枕倦照し過ぐ明月の痕、風致仍
 ほ思ふ林下の臥羅浮夢は返る冷冰の魂と、象を咏して
 云ふ明王、德を慎んで遠人臻る、異獸は由來珍とする所
 に非ず、旋々西洋を出で、禹貢に供し、今は東土を過ぎて
 堯仁を戴く、圓蹄鐵を剪り蹄還た去り、長鼻蛇を欺きて

又仲、恰命畫圖、無青國、翻崇太保典言陳、造語緻密、風味幽妙、皆可與宋清詩家相翱翔、春畊一日招飲、余出其所藏清人稼圃菊花圖乞題詩、余席上染一絕云、露洗黃葩香自淨、風吹翠葉態還加、竹門柴戶孤村晚、隱者精神此是花。

豊後儒員、田村憲、號竹田、以文人畫名、于海西、時遊騎陽、與余屢爲贈答、且就譯官劉吉甫、折衷福惠全書、竹田所見云、鶯去鵲來萬綠勻、松魚早已入時、新彩旗高插竿千尺、打鼓鳴鑼祭水神、曰城途中所見云、綠漲平田、白鷺飛、楊梅子熟赤離離、入村先見愛民意、高築川頭禹稷祠、宿黃葉夕陽村舍云、育才真可樂、問字客如雲、燭影分窓映、書聲夾水

卷きて又た仲ぶ、恰も畫圖に命じて國に育する無く、翻て太保典言の陳ぶるを崇む」と、造語緻密にして風味幽妙なり、皆な宋清の詩家と相翱翔す可し、春耕、一日余を招飲し、其の藏する所の清人稼圃の菊花の圖を出して題詩を乞ふ、余席上に一絶を染めて云ふ、露は黄葩を洗ひて香自から淨く、風は翠葉を吹きて態還た加ふ、竹門柴戸孤村の晚、隱者の精神は此れ是の花」と。

豊後の儒員、田村憲、竹田と號し、文人畫を以て海西に名あり、時に騎陽に遊び、余と屢々贈答を爲す、且つ譯官劉吉甫に就て福惠全書を折衷す、竹田所見に云ふ、鶯去り鵲來りて萬綠勻し、松魚早く已に時に入りて新なり、彩旗高く挿む竿千尺、鼓を打ち鑼を鳴らして水神を祭ると、曰城途中の所見に云ふ、綠は平田に漲りて白鷺飛び、楊梅子は熟して赤離々たり、村に入りて先づ見る民を愛するの意を、高く築く川頭禹稷の祠と、黃葉夕陽村舍に宿するに云ふ、才を育ふ眞に樂むべく、字を問ふの客は雲の如し、燭影窓を分ちて映し、書聲水を夾んで聞ゆ、露は温にして吟案賦ひ、花は近くして研池瀟し、依

聞、露温吟案賦、花近研池薰、依戀何堪去、回頭望夕曛、又七言贈余云、東西隔絕在天涯、偶聚鴻踪如有期、共語平生希遇事、果然樂趣屬新知、余亦呈七絕二首云、漂泊能生妙妙思、江山縮入一囊詩、逢君堪喜還堪恨、剛逼歸帆屈指時、筆管腰刀擬畫人、徜徉二歲在瓊津、知君非管探奇貨、墨妙奪將山水新、水野勝號媚川瓊浦譯司、與田村竹田結詩盟、竹田某日示諸作、曰、此是媚川所嘗與清人江芸閣贈答者、請君以此爲鄉國之歸遺、記以示指占之嗜、江芸閣奉憶其一云、人雖異域性偏親、手足情深憶海濱、寄托花枝青眼看、莫教隨意落紅塵、媚川和前韻、其一云、從宿花深相共親、劉郎猶憶舊溪濱、爲傳仙

戀何ぞ去るに堪へん、頭を回して夕曛を望む」と、又七言、余に贈るに云ふ「東西隔絶、天涯に在り、偶々聚る鴻踪期する有るが如し、共に語る平生希遇の事、果然として樂趣新知に屬すと、余も亦た七絶二首を呈して云ふ「漂泊能く生ず妙々の思、江山縮めて入る一囊の詩、君に逢ふは喜ぶに堪へたり、還た恨むに堪へたり、剛に逼る歸帆指を屈するの時」筆を腰刀に管へて畫人に擬し、徜徉二歲瓊津に在り、知る君が當に奇貨を探るのみに非るを墨妙奪將す山水の新」と。

水野勝は媚川と號し、瓊浦の譯司なり、田村竹田と詩盟を結ぶ、竹田某日、諸作を示して曰く、此は是れ媚川の嘗て詩人江芸閣と贈答する所の者なり、請ふ若此を以て鄉國の歸遺と爲せと、記して以て指占の嗜を示す、江芸閣憶を奉ず、其の一に云ふ「人は異域と雖も性は偏に親し、手足情深くして海濱を憶ふ、花枝を寄托す青眼に看よ、随意に紅塵に落さしむる莫れ」と、媚川前韻を和す、其の一に云ふ「花深に宿して相共に親しむし従り、劉郎は猶ほ憶ふ舊溪濱爲めに傳ふ仙子本と冰骨、人間に向つ

子本冰骨、不向人間、汗點塵、芸閣其二云、天生靈慧若爲詩、文苑應推第一流、書畫詩詞賦入妙、掀翻瓊浦也、難求、媚川其二云、咏月吟花幾許儔、吳門無客不風流、最憐春水綠波句、除卻江郎也、孰求、芸閣其三云、明夏乘風續舊歡、仍勞車馬駐江干、新詩遞換相思句、茶熟香溫各自看、媚川其三云、喚酒徵歌魚鰈歡、換心山下小欄干、青樽再對知何日、一笑樽前話舊看、芸閣其四云、辛盤椒酒試題詩、寒鵲爭春占一枝、楊柳乍黃梅乍白、一年歡賞動頭時、媚川其四云、漫擊紅箋和妙詩、腰軒柿葉綠枝枝、果然歡賞回頭過、不復柳黃梅白時、結二句用原詩隱括、芸閣改定舊詩云、一百六日鴛鴦譜、二十四番梅信風、

て點塵を汗さす」と芸閣の其の二に云ふ「天生靈慧を生ず若爲なる儔ぞ、文苑應に推すべし第一流と、書畫詩詞賦妙に入る、瓊浦を掀翻するに也た求め難し」媚川の其の二に云ふ「月に咏し花に吟す幾許の儔ぞ、吳門、客の風流ならざる無し、最も憐む春水綠波の句、江郎を除卻して也た孰にか求めん」と芸閣の其の三に云ふ「明夏風に乘じて舊歡を續ぐ、仍ほ車馬を勞して江干に駐る、新詩遞に換ふ相思の句、茶は熟し香は温にして各自に看る」と媚川の其の三に云ふ「酒を喚び歌を徵して魚鰈を罄す、換心山下の小欄干、青樽再び對す知る何の日ぞ、樽前に一笑して舊を話して看んと、芸閣の其の四に云ふ「辛盤椒酒試に詩を題し、寒鵲春を争ひ一枝を占む、楊柳は乍ち黃に梅は乍ち白し、一年の歡賞頭を動かすの時」と媚川の其の四に云ふ「漫に紅箋を擊て妙詩を和す、軒を壓するの柿葉綠枝枝、果然として歡賞は頭を回せば過ぐ、復た柳黃梅白の時ならず」と、結二句、原詩を用ひて隱括す、芸閣舊詩を改め定めて云ふ「一百六日鴛鴦

何事乍開還乍落、無端成色復成空、紅樓月
 冷霜凝面、綃帳金寒石作胸、清夜攔心、鄉自
 想、真心爲我幾人同、望媚川先生、面諭老杉
 板、乞可個教他、將百鶴用心收管、不可胡亂
 接客、不可懶宿茶屋、爲要我明夏來、崎、自當
 重重酬勞、此字看過即行焚去、不可暫留也、
 媚川長句一首、次韻示意云、尤雲滯雨須臾、
 夢、梅雪桃霞次第風、雲海三千疑隔世、因緣
 十二怕成空、笑從柳葉開盈面、恨學蕉心卷
 在胸、綠樹成陰時已近、來遲勿與杜郎同、諭
 老杉板之語、逐一面命、事事金諾、幸勿勞念、
 會晤在還、話不絮、唯結一句如意可也、芸閣
 寄懷云、瓊浦名花依綠水、姑蘇人暫倚樓臺、
 重洋不隔相思夢、萬屋町前夜夜來、媚川次

の譜二十四番梅信の風何事ぞ乍ら開き還た乍ら落つ、
 端なく色を成し復た空と成る、紅樓月は冷にして霜は面
 に凝り、綃帳金は寒くして石胸と作る、清夜心を攔して
 郷自から想ふ、真心我が爲めに幾人か同じ」と媚川先生
 を望む、老杉板に面諭して、個の他を教ゆべきを乞ふ百
 鶴を將て心を用ひて收管し、胡亂に客に接客可からず、
 茶屋に懶宿す可からず、爲に要す我れ明夏崎に來り、自
 から當に重々勞に酬ゆべし、此の字看過して即ち焚去
 を行へ、暫も留むべからざるなりと、媚川長句一首韻に
 次し意を示して云ふ、尤雲滯雨須臾の夢、梅雪桃霞次第
 の風、雲海三千疑ふらくは世を隔つかと、因緣十二怕ら
 くは空と成らん、笑は柳葉に從ひ開て面に盈ち、恨は蕉
 心を學び卷いて胸に在り、綠樹陰を成す時已に近し、來
 遲杜郎と同すること勿れ」と、老杉板に諭すの語は、逐一
 面命して事々金諾す、幸に念を勞する勿れ、會晤還に在
 り、話は絮せず、唯だ結一句は意の如くにして可なり、芸
 閣懷を寄するに云ふ、瓊浦の名花、綠水に依り、姑蘇の人
 は暫らく樓臺に倚る、重洋隔てず相思の夢、萬屋町前夜々
 來ると、媚川は韻に次して云ふ、人世春風老後を吹く、舊

韻云、人世春風吹、老後、依舊花開耶馬臺、仙
 棹重福知幾日、雲鬢晚掠待君來、芸閣戲簡
 袖咲妓云、丸山街畔牡丹披、一根花開爲底
 遲、應是東皇深護惜、妬花風雨欲來時、媚川
 次韻云、春風吹盡百花枝、要聽彈琴來那遲、
 才調支園眞一軸、唯愁有咏白頭時、芸閣戲
 簡袖扇妓云、菊花天訂雪花天、孤負鄉鄉纖
 力綿、明歲分瓜涼露下、牽牛織女又相連、媚
 川次韻云、倚欄細數女牛天、不惜寒窓早織
 棉、寄語王郎兩迎取、桃根桃葉本相連、芸閣
 戲簡百鶴元且作云、吳山瓊浦兩相望、元日
 同看天一方、唐屋歡呼田屋靜、今朝可否憶
 蕭郎、媚川次韻云、惟悼三春猶跋望、欲醫儂
 病、奈無方、朝來喜迎吳中信、讀得郎書似看

詩山堂詩話

に依りて花は開く耶馬臺、仙棹重福知んぬ幾日ぞ、雲鬢
 晩に掠して君の來るを待つ」と、芸閣戲に袖咲妓に簡し
 て云ふ、丸山街畔牡丹披き、一根花は開く底の爲めにか
 遅き、應に是れ東皇深く護惜するなるべし、花を妬む風
 雨來らんと欲する時と、媚川韻に次して云ふ、春風吹き
 盡す百花の枝、彈琴を聴かんと要す來る那ぞ遅き、才調
 文園眞に一軸唯だ愁ふ白頭を咏する時あるを」と、芸閣
 は戲に袖扇妓に簡して云ふ、菊花の天は訂す雪花の天、
 孤負す郷々力綿を織るに、明歲瓜を分つ涼露の下、牽牛
 織女又相連る」と、媚川は韻に次して云ふ、欄に倚りて細
 かに數ふ女牛の天惜ます寒窓早に棉を織るを、語を寄
 す王郎兩ながら迎へ取て、桃根桃葉本と相連ならん」と、
 芸閣は戲に百鶴に簡する元且の作に云ふ、吳山瓊浦兩な
 がら相望む、元日同じく看る天の一方、唐屋は歡呼して
 田屋は靜なり、今朝の可否蕭郎を憶ふ」と、媚川は韻に次
 して云ふ、惟だ悼む三春猶ほ跋望す、儂が病を醫せんと
 欲するも方なきを奈せん、朝來喜び迎ふ吳中の信、郎が
 書を讀み得て郎を看るに似たり」と、詩の得失は自から

郎詩之得失、自備人性、法之裁斷、必極唐山、崎陽瀕海、毛人所輾、土俗閑逸、悉存雅風、所謂丹之所藏者赤、漆之所藏者黑、豈其虛語哉。

南部彝伯民受業皆川淇園翁、以經術垂帷周防、其學尤長、于考據、嘗著技癢錄、茶山翁有序、今行于世、詩雖非所得、亦稍有風味、東山後花云、廿年修就東山屐、海上春風經幾秋、千手院中梅百株、花落盡葉如席、清末道中作云、柴門架樹傍江干、村遠人稀心事安、春夢漫漫起常晚、紅梅花上日三竿、某生齎示此諸作、曰、是不知何人詩、後遇茶山翁問之、伯民之作也、於茲錄之、示余一樹之嗜、九州女史知名者、筑前少梁、及采蘋、共有風

人の性に備はもる、法の裁斷は必らず唐山に極る、崎陽は海に瀕し、毛人の輾る所なり、土俗閑逸、悉く雅風を存す、謂はゆる丹の藏する所の者は赤く、漆の藏する所の者は黒しと、豈に其れ虚語ならんや。

南部の彝伯民は業を皆川淇園翁に受け、經術を以て帷を周防に垂れ、其の學は尤も考據に長ぜり、嘗て技癢錄を著す、茶山翁序あり、今世に行はる、詩は得る所に非ずと雖、亦た稍や風味あり、東山に花に後るゝに云、廿年修し就る東山の屐、海上の春風幾秋を経たり、千手院中梅百株、花落ち盡くして葉は席の如しと、清末道中の作に云ふ柴門樹を架して江干に傍ふ、村は遠く人は稀にして心事安し、春夢漫漫々起る常に晚し、紅梅花上日三竿と、某生此の諸作を齎し示して曰く、是れ何人の詩なるを知らずと、後ち茶山翁に遇ひ之を問へば、伯民の作なりと、茲に於て之を録して、余が一樹の嗜を示す。

九州の女史にして名を知らる者は筑前の少梁及び采蘋

月之趣、少藥、龜昭陽之女、采蘋、原古處之女也、俱出乎南冥堂之門、少藥有作、七絕云、雷岳丸丸松柏茂、蔚藍堪與徂徠、鬪閑人獨有、少藥愚、詆毀英雄、嚼炒豆、又少小時賦、五絕、而名聲隆起、詩云、扶桑第一梅、今夜爲君開、欲問花真偽、五更踏月來、此其志高邁、其旨卓絕、特似非女子語氣、采蘋、美人調馬云、黃金之埒、弄新晴、玉手探、鞭舞影輕、汗血猶知惜春色、四蹄總避落花行、題延齡松云、薩藩世子手曾栽、閑盡風霜已幾回、弱植慙吾蒲柳質、天矯羨汝棟梁材、蟠根將化老龍躡、翠蓋時迎五馬來、此際莫教俗人飲、青蛇恐影掌中杯、嫺雅清新、稍有明末之家風矣。

龜南冥曰、唐人盧僕句、傷心江上客、不是故

なり、共に風月の趣あり、少藥は龜昭陽の女にして采蘋は原古處の女なり、俱に南冥堂の門に出づ、小藥作あり、七絶に云ふ、雷岳丸々として松柏茂る、蔚藍徂徠と鬪ふに堪へたり、閑人獨り少藥の愚なる有り、英雄を詆毀して炒豆を嚼むと、又た少小時に五絶を賦して名聲隆起す、詩に云ふ、扶桑第一の梅、今夜君が爲めに開かん、花の眞偽を問はんと欲せば、五更月を踏んで來れと、此れ其の志高邁にして其の旨、卓絶なり、特に女子の語氣に非ざるに似たり、采蘋の美人調馬に云ふ、黄金の埒、新晴を弄し、玉手鞭を探つて舞影輕し、汗血猶は知る春色を惜むを、四蹄總べて、落花を避けて行く、と、延齡松に題して云ふ、薩藩の世子手づから曾て栽う、風霜を閑盡する、と已に幾回ぞ、弱植慙つ吾が蒲柳の質、天矯羨む汝が棟梁の材、蟠根將に老龍に化して躍らんとす、翠蓋時に五馬を迎へ來る、此の際俗人をして飲せしむる、莫れ青蛇恐らくは影せん掌中の杯と、嫺雅清新にして稍、明末の家風あり。

龜南冥曰、唐人盧僕の句、心を傷まむ江上の客、是れ故

郷人之不字、有人以非字爲訓譯者、宿儒雋士、雷同其說、昏昏悽悽、不曉其非、余以爲、不卽不義、全非非義、言以江上旅客、認疑是故郷人乎、若以非字解不字、則疑見江上客爲故郷人、卽非故郷人之義、此其議端、多雖近似、至其風趣、則余說幽妙、自覺倍蓰、又杜甫句云、昔歸相識少、蚤已戰場多、少是多之反、凡裁詩之法、上句舉示、則下句略之、此亦上舉相識二字、而其下句戰場下略之、言昔日歸郷國、相識者、幾稀少、今蚤已於戰場、相識者、卻得太多也、古來諸家皆謂、今時蚤已處處戰場、殊多、而干戈塗血、然則昔歸相識至少、今也必知斷而亡、此非、雷熟字、反對、意味亦平淺、類似迂拙、得此解、義理判然、初霽。

郷の人ならざるかの不の字を、人非の字を以て訓譯を爲す者あり、宿儒雋士も其の説に雷同し、昏昏悽悽として其の非を曉らず、余以爲へらくは不卽不の義にして全く非の義にあらず、言ふは江上の旅客を以て、是れ故郷の人かと認め疑ふ、若し非の字を以て不の字を解せば、則ち疑ひ見る江上の客は、故郷の人たるか、卽ち故郷の人に非ずの義なり、此れ其の議端多くは近似すと雖、其の風趣に至りては、則ち余が說幽妙なると、自から倍蓰を覺ゆ、又た杜甫の句に云ふ昔し歸りしとき相識少なり、蚤く已に戰場に多し」と、少は是れ多の反なり、凡そ詩を裁するの法は、上句に舉示するときは、則ち下句に之を略す、此も亦た上に相識の二字を舉げて、其の下句の戰場の下に之を略するなり、言ふは昔日郷國に歸りしときは相識る者幾んど稀少なりしに、今は蚤く已に戰場に於て相識る者却て太多きを得たりと、古來諸家は皆な謂ふ、今時蚤く已に處々戰場殊に多くして干戈血を塗ると、然らば則ち昔歸りしとき相識至つて少く、今や必ず斷えて亡きを知ると、此れ營に熟字反對せざるのみに非ず、意味も亦た平淺にして迂拙に類似す、此の解を得て義理判然、初めて俗儒の五里霧を穿らす、今詩を讀む者の

俗儒五里霧也、今爲讀詩者、錄以便後世。

筑紫名僧千崖者、能持戒律、善文人畫、聞于王侯間、王侯以威召畫、則上人每謝絕焉、人皆稱其智識、性亦好詩、西都府覽古云、稻收田鶴濕衣秋、甚古千年紫府樓、郊外猶餘觀世寺、暮鐘聲落帝王洲、望蒙古山云、憶昔太元寇九州、樓船十萬欲加憂、神風那識東南起、蒙古山亭是鬪護、豪爽可見、余嘗訪上人、上人親披戶而延談、及古今、余乞揮畫、上人直染數紙以惠、上人亦乞余書舊稿、上人謬稱曰、非余輩所及、復索卽賦、乃賦一詩曰、蜉蝣一日鶴千年、所賦存亡皆是天、平等源委長短說、南華三昧結前緣。

賴襄、字子成、號山陽、藝州之產、嘗下帷京雒、

爲めに錄して後世に便にす。

筑紫の名僧千崖といふ者能く戒律を持し文人畫を善くし、王侯の間に聞こゆ、王侯威を以て畫を召せば則ち上人毎に謝絶す、人は皆な其の智識を稱す、性亦た詩を好む、西都府の覽古に云ふ、稻は收つて田鶴衣を濕ほすの秋、甚は古し千年紫府の樓、郊外猶ほ餘す觀世寺、暮鐘聲は落つ帝王洲」と蒙古山を望むに云ふ、憶ふ昔大元九州に寇す、樓船十萬憂を加へんと欲す、神風那ぞ識らん、東南に起るを、蒙古山亭は是れ鬪護と、豪爽見る可し、余嘗て上人を訪へば、上人親ら戸を披ひて延き談、古今に及ぶ、余揮畫を乞へば、上人は直ちに數紙を染めて以て惠まる、上人も亦た余に乞ふて舊稿を書せしむ、上人謬り稱して曰く、余輩の及ぶ所に非ずと、復た卽賦を索む、乃ち一詩を賦して曰く、蜉蝣は一日鶴は千年、賦する所の存亡皆な此れ天なり、源委長短の説を平等にして、南華三昧前縁を結ぶと。

賴襄字は子成、山陽と號す、藝州の産にして、帷を京雒に

專業教授、其才拔群、性尤工文章、而詩賦亦
 篇什頗多焉、余錄其尤可愛者、七言云、春風
 春雨已開花、春雨春風復散花、昨日知音今
 日寇、人間萬事恰如花、此其幼時所賦、當其
 時也、名聲勃然、特有奇童之稱焉、已長辭、祿
 去、邦如敝屣、其卓犖高邁、精神活動、令人直
 發感歎、咏鷹述懷云、秋天高處自雄飛、食有
 霜禽棲有枝、何必侯門貪一飽、碧滕三尺見
 人羈、崎陽雜詠云、肥海松魚漸上街、火雲看
 作亂峯堆、連朝少女風方熟、等待洋船入港
 來、過關原云、村村有酒是誰恩、弛擔旗亭醉
 午暄、不識血戈汗馬地、竹與昇睡過關原、鴨
 東卽事云、鴨堤花落曉煙馨、多少佳人睡未
 醒、杜宇一聲過水去、大和橋北數峰青、題利

三四

下し、專はら教授を業とす、其の才群に拔く、性尤も文章
 に工なり、而して詩賦も亦た篇什頗る多し、余は其の尤
 も愛す可き者を録す、七言に云ふ「春風春雨已に花を開
 かしめ、春雨春風復た花を散らす、昨日の知音は今日の
 寇人間萬事恰も花の如し」と、此れ其の幼時賦する所な
 り、其の時に當り名聲勃然として特に奇童の稱あり、已
 に長して祿を辭し、邦を去ること敝屣の如し、其の卓犖
 高邁にして精神活動すること、人をして直ちに感歎を發
 せしむ、鷹を咏し懷を述べて云ふ「秋天高き處自から雄
 飛す、食に霜禽あり棲に枝あり、何ぞ必らずしも侯門に
 一飽を貪つて、碧滕三尺人に羈がれん」と、崎陽の雜詠に
 云ふ「肥海の松魚漸く街に上り、火雲看、亂峯の堆を作す、
 連朝少女風方に熟すれば等しく、待つ洋船港に入り來
 るを」と、關原を過ぐるに云ふ「村村有酒あり是れ誰が恩ぞ、
 擔を旗亭に弛べて午暄に醉ふ、識らず血戈汗馬の地、竹
 與睡を昇して關原を過く」と、鴨東卽時に云ふ「鴨堤花落
 ちて曉煙馨はし、多少の佳人睡未だ醒めず、杜宇一聲水

休居士像云、杯椀經評即百城、可憐蘊薩先、
韓彭、卻勝猿郎鬼長候、松風傳得一家聲、贈
深壽卿云、一榻燈花落復生、談餘茶鼎似、蟬
鳴窓前知有芭蕉樹、夜靜時聞墜露聲、文人
無詩、詩人無文、今觀此諸作、卻覺其不然、風
韻清致、雄才餘蘊、文事有詩備、亦快哉、余亦
嘗訪山陽、席上呈一詩云、詩文書畫奇中妙、
海內有君君筆端、早去廣陵何等趣、洛陽坐
作太山看。

賴協號春嶂、山陽之嫡子、躬在藝陽、克不墜
家學、列儒員、少小耽詩、其七絕云、芙蓉影裡
水如錦、雨歇香風自在飛、日暮橋邊迎月出、
滿船笑語載花歸、亦清才也。

吾邦方伎家、以外科爲專門者、多無不知崎

を過ぎて去り、大和橋北數峯青し」と、利休居士の像に題して云ふ、杯椀評を経て即ち百城、憐む可し蘊薩韓彭に先だつを、却て勝る猿郎の鬼長く、蹊ゆるに、松風傳へ得たり一家の聲」と、深壽卿に贈るに云ふ「一榻の燈花落ちて復た生ず、談餘茶鼎蟬鳴に似たり、窓前知る芭蕉の樹あるを、夜靜かにして時に聞く墜露の聲」と、文人に詩なく、詩人に文なし、今、此の諸作を觀て、却て其の然らざるを覺ゆ、風韻清致、雄才餘蘊、文事に詩備あり、亦た快なるかな、余も亦た嘗て山陽を訪ひ、席上一詩を呈して云ふ「詩文書畫奇中の妙、海内君あり君が筆端、早に廣陵を去る何等の趣ぞ、洛陽坐して太山の看を作す」と。

賴協、春嶂と號す、山陽の嫡子にして、躬、藝陽に在りて、克く家學を墜さず、儒員に列す、少小より詩に耽る、其の七絶に云ふ「芙蓉影裡、水錦の如し、雨歇んで香風自在に飛ぶ、日暮橋邊月を迎へて出で、滿船の笑語花を載せて歸る」と、亦た清才なり。

吾邦の方伎家は、外科を以て専門と爲す者、多くは崎

陽有楮林榮哲者、又比歲負笈而扣其門者、不知幾許、業成而分散諸邦焉、其於崎陽、風詠亦莫榮哲若矣、榮哲號昧山、齡過耳順、其雅興迨今不衰、余嘗訪之、年已七十、門人朋友等、選吉辰上堂稱誕辰之觴、時有述懷作、云、四月薰風綠樹鮮、誕辰開宴此招賢、從遊弟子喧門下、撫育兒孫擁膝前、庭上芝蘭同臭味、屏頭錦繡揭詞篇、往時辛苦嘗糞、七十如童眠食全、其友有業內科者、姓武田、名作八、字孟文、號媚山、媚山賀楮林昧山七十初度、贈桃饅七枚、云、欲向丹房獻壽杯、村翁乞藥接鞋來、忽思朱雀窓前興、仙菓相攀捧七枚、又云、我隱西山已十年、時思舊友夜無眠、老齡報至桃花日、華誕逢來槐葉天、瓊

に楮林榮哲といふ者有るを知らざる無し、又た比歲笈を負ひて其の門を扣く者幾許なるを知らず、業成りて諸邦に分散す、其の崎陽に於て風詠を善くする者は亦榮哲に若く莫し、榮哲は昧山と號し、齡耳順を過ぎ、其の雅興今に迨んで衰へず、余は皆て之を訪ふ、年已に七十、門人朋友等吉辰を選び、堂に上て誕辰の觴を稱ぐ、時に述懷の作あり、云ふ「四月薰風綠樹鮮なり、誕辰宴を開きて此に賢を招く、從遊の弟子門下に喧しく、撫育の兒孫膝前を擁す、庭上の芝蘭は臭味を同うし、屏頭の錦繡は詞篇を掲ぐ、往時の辛苦嘗て糞くに堪へたり、七十、童の如く眠食全し」と、其の友に内科を業とする者あり、姓は武田、名は作八、字は孟文、媚山と號す、媚山は楮林昧山の七十の初度を賀し、桃饅七枚を贈りて云ふ、丹房に向つて壽杯を獻せんと欲す、村翁藥を乞ひ鞋を接して來る、忽ち思ふ朱雀窓前の興、仙菓相攀ちて七枚を捧ぐ」と、又た云ふ「我は西山に隱る已に十年、時に舊友を思ふて、夜眠る無し、老齡報じ至る桃花の日、華誕逢ひ來る槐葉の天、瓊

海儒醫君獨健、榮城鯖鱧世相傳、尙追容祖
 宜頤壽、孝養元存桂子賢、余亦暮春訪武田
 孟文居、席上呈一絕、云、濁醪終日傾春盞、比
 得高陽免解嘲、破卻貧家無一物、籬邊摘菜
 當魚肴、岷山題山水圖、云、糝糊殘雪擁山明、
 隔水樓臺老樹橫、收釣野橋人度處、半天孤
 月鴈歸聲、又在東都賦七律、云、曾聽芳原燈
 火名、家家奇巧各堪爭、當軒作浪登龍勢、環
 柱生風走馬聲、翡翠簾垂花影動、玻璃障朗
 月華明、此鄉況有溫柔樂、便是人間不夜城、
 岷山賀進藤新介、九十誕辰、云、遙聞壽考欲
 神飛、過艾初裁賀髮詩、潤體心田耕道德、扇
 牀孝養育賢兒、長齡豈副三極草、故典會誦
 五總龜、恨不撐杯關此讎、重携觴酒及期頤、

詩山堂詩話

の儒醫君獨り健なり、榮城の鯖鱧世に相傳ふ、尙ほ容祖を
 追ふて宜く壽を頤ふべし、孝養元と存す桂子の賢と、余
 も亦た暮春に武田孟文の居を訪ひ、席上に一絶を呈して
 云ふ、濁醪終日春盞を傾け、比し得たり高陽の解嘲を免
 るゝに、破卻す貧家に一物なく、籬邊に菜を摘て魚肴に
 當つと、岷山、山水の圖に題して云ふ、糝糊たる殘雪山を
 擁して明なり、水を隔つる樓臺老樹横はる、釣を收めて
 野橋人度る處、半天の孤月鴈の歸る聲と、又た東都に在
 りて七律を賦す、云ふ、曾て聽く芳原燈火の名、家々の奇
 巧各と争ふに堪へたり、軒に當りて浪を作す登龍の勢、柱
 を環て風を生ず走馬の聲、翡翠簾は垂れて花影動き、玻
 璃障は朗にして月華明なり、此の郷況んや溫柔の樂あり、
 便ち是れ人間不夜の城と、岷山、進藤新介の九十の誕
 辰を賀して云ふ、遙に壽考を聞きて神飛ばんと欲す、艾
 を過ぎて初めて裁す賀髮の詩體を潤ほすの心田は道德
 を耕し、牀を扇ぐの孝養は賢兒を育す、長齡豈に副せん
 や三極の草、故典會て誦んず五總の龜、恨むらくは杯を

俱有清秀之氣、楡林氏多賢子、長榮健、號靜山、善續其業、弟榮叔、號桐園、開業浪津、以和蘭窮理、教導醫生、共有雅優之致、靜山五絕云、古木寒山秀、幾家依水濱、此中幽景足、不羨武陵人、桐園梅鶴圖云、仙禽獨立玉條斜、應是孤山處士家、不啄稻糧爲飽滿、更甘清味喫梅花、余歸鄉時、味山以自製蘭藥數品爲贈、又併錄爲應接雅交之話種。

肥後疾醫、村井大年、號純壽、其嫡姪吾、父子俱爲博學顯才、亦善風詠、純壽送池蘭陵之筑前云、鳥啼花落兩無情、水繞山廻互送迎、玄海東西南驛路、紫州三百二行程、銀鞭白馬留將去、綠酒金杯醉屢傾、此別縱非燕市飲、歌悲筑後筑前聲、春盡山莊卽事云、我是

撐て此の語に關らざるを、重て餽酒を携へて期願に及ばんと、俱に清秀の氣あり、楡林氏に賢子多し、長は榮健、靜山と號し、善く其の業を續ぎ、弟は榮叔、桐園と號し、業を浪津に開き、和蘭の窮理を以て醫生を教導し、共に雅優の致あり、靜山の五絶に云ふ「古木寒山秀で、幾家か水濱に依る、此の中幽景足る、羨ます武陵の人」と、桐園の梅鶴の圖に云ふ「仙禽獨立して玉條斜なり、應に是れ孤山處士の家なるべし、稻糧を啄まず飽滿を爲す、更に清味を甘んじて梅花を喫す」と、余の郷に歸る時に、味山は自製の蘭藥數品を以て贈と爲す、又た併せ録して、應接雅交の話種と爲す。

肥後の疾醫、村井大年は純壽と號す、其の嫡姪吾、父子俱に博學顯才たり、亦た風詠を善くす、純壽の池蘭陵の筑前に之くを送るに云ふ「鳥啼き花落ちて兩ながら無情なり、水繞り山廻りて互に送迎す、玄海東西南の驛路紫州三百二の行程、銀鞭白馬留めども將に去らんとす、綠酒金杯酔ふて屢傾く、此の別縱ひ燕市の飲に非ざるも、歌は悲し筑後筑前の聲」と、春盡山莊の卽時に云ふ「我是

人間度外人、飄然獨往自由身、牀無俗客唯
 高臥、食有園葵、不厭貧、鵲哭鶯歌、歸去日、花
 殘柳暗、老來春、鄰村酒美、須供醉、重對嵐光
 樹色新、春盡日、偶作云、昨風纔見百花開、今
 雨還聞杜宇催、坐似僧甌常兀兀、觀如佛界
 只恢恢、清遊願足、醉過去、熟睡緣堪結、未來
 貪酒耽詩禪、亦會乃公偏自笑、多才山莊初
 夏云、流光不獨愛春花、更愛園林綠葉加、昨
 夢鶯兼鵲共別、今遊月與水尤佳、青繒繪雪
 涼生扇、玉鼎焚香篆起、紗賞事無過、初夏景
 風情故在、羨新茶、酬竹田見寄云、吾寧僻住
 柴溟陽、求道不弛又不張、開此二千年眼目
 傳夫一萬首和方、酒唯任取時時醉、茶是愛
 分品品香、自笑雖非湖海士、未除豪氣臥高

れ人間度外人、飄然として獨往す自由の身牀に俗客
 なく唯だ高臥し、食に園葵ありて貧を厭はず鵲は哭し
 鶯は歌ふ歸去の日花は殘し柳は暗し老來の春、鄰村
 酒美にして須らく醉に供すべし、重ねて嵐光に對して
 樹色新なりと、春盡日の偶作に云ふ、昨風纔に見る百花
 の開くを、今雨還に聞か杜宇の催すを、坐は僧甌に似
 て常に兀々、觀は佛界の如く只だ恢恢、清遊願はくば過
 去に醉ゆるに足らん熟睡の緣は未來を結ぶに堪へ
 たり、酒を貪ほり詩に耽り禪も亦た會す、乃公偏に自か
 ら多才を笑ふと、山莊の初夏に云ふ、流光獨り春花を愛
 するのみならず、更に愛す園林綠葉の加はるを、昨夢鶯
 と鵲と共に別れ、今遊月と水、尤も佳なり、青繒を繪
 きて涼、扇に生じ、玉鼎香を焚きて篆紗に起る、賞事は初
 夏の景に過る無し、風情故らに新茶を煮るに在りと、竹
 田の寄せらるゝに酬ふに云ふ、吾は僻住に寧んず柴溟
 の陽、道を求めて弛めず又た張らず、此の二千年の眼目
 を開き、夫の一萬首の和方を傳ふ酒は唯だ取るに任
 す時々、の酔茶は是れ分を愛して品々香し自ら笑、湖

牀、煇吾春日山園云、豔陽二三月、好聞黃鶯
 鳴莫使落花深、新花與舊識、絃上有知音、才
 雄氣豪、有詩亦如此、世醫動輒語及醫事、賦
 詩何益、實可愧之至也、今余爲醫醫、揭出龜
 鑑以爲話種。

彼崎弼字承弼、號小竹、又號長堂、業儒、教詩、
 書生蟻慕、浪津内、人讓、臯比、立其下、風、膏批、
 評賴山陽詩文集、而早有芳聲、實一鉅儒也、
 亦好詩、賦、題嵐山圖云、翠滴水逾清、花明山
 未暮、長橋野寺西、先自幾人度、與詩佛山陽
 舟游云、霞彩追舟映、細淪涼風勸酒起、青蘋
 快哉今夕知何夕、相遇三都三故人、題畫云、
 夜深寒氣烈、人語四鄰無、只有梅花在書窓
 月不孤、胡枝花圖云、野花秋亦好、紅紫媚金

海の士に非ずと雖も、未だ除かず豪氣の高牀に臥する
 をと、煇吾か春日の山園に云ふ豔陽二三月、好し聞く黃
 鶯の鳴するを、落花をして深から使むる莫れ、新花と舊
 識と、絃上、知音有り」と、才雄にして氣豪、詩あること
 亦た此の如し、世の醫は動もすれば輒ち語、醫事に及
 ぶ詩を賦するも何の益かあらん、實に愧づべきの至な
 り、今余は醫醫の爲に龜鑑を掲出して以て話種と爲す。
 彼崎弼字は承弼、小竹と號す、又た長堂と號す、儒を業と
 して詩を教ゆ、書生蟻慕す、浪津の内、人々臯比を讓りて
 其の下風に立てり、膏て賴山陽の詩文集を批評して早
 に芳聲あり、實に一鉅儒なり、亦た詩賦を好む、嵐山の圖
 に題して云ふ翠滴りて水逾清く、花明にして山未だ暮
 れず、長橋野寺の西、先づ自から幾人か度る」と、詩佛山陽
 と舟遊するに云ふ霞彩舟を追ふて細淪に映す、涼風酒を
 勸めて青蘋に起る、快なるかな今夕知る何の夕ぞ、相遇
 ふ三都の三故人と、畫に題する云ふ夜深くして寒氣烈
 しく、人語四鄰に無し、只だ梅花の在る有り、書窓、月孤な
 らずと、胡枝花の圖に云ふ野花秋も亦た好し、紅紫、金風
 に媚ぶ、片々として香を追ふの蝶沈々として露に咽ぶ

風片片追香蝶、沈沈咽露蟲、中秋泛舟城東、
 云、新渠通郭外、畫舫繫城隅、月出天如畫、潮
 來水似湖、桂香添酒味、草露任衣濡、更鼓君
 休數、此晴近歲無、皆有佳興、余嘗寄呈七絕
 一首云、想像吾心曾不忘、伊人宛在水中央、
 何年相賞佳風月、握手江樓泛一觴。

三宅邦號橘園、加賀之産、嘗遊京洛、受業洪
 園翁、別建見解、開講筵於兩晉街、倚才博識、
 暗誦經史、義理分明、非今日俗儒之所及、其
 著書、鷄林情盟、博遊漫載、助語審象、既經刊
 鏤、世多流傳、性亦好詩、送余遊長崎云、出日
 逐、頗自與、瓊、更追月、脚向崎鎮、梳風沐雨三
 千里、羨汝鞋踪跨、兌震、當此時、而余崎陽無
 知己、翁乃與尺一、轉以客崎陽書、中云、詩山

詩山堂詩話

の蟲と、中秋、舟を城東に泛ぶるに云ふ「新渠郭外に通
 じ、畫舫城隅に繫ぐ、月出て、天畫の如く、潮來りて水湖
 に似たり、桂香は酒味を添へ、草露は衣の濡ふに任す、
 更鼓君は數ふることを休めよ、此の晴近歲に無し」と、皆
 な佳興あり、余嘗て七絶一首を寄呈して云ふ想像す吾
 が心に會て忘れず、伊の人宛として水の中央にあり、何
 れの年にか相賞す佳風月、手を握りて江樓に一觴を泛
 べん」と。

三宅邦、橘園と號す、加賀の産なり、嘗て京洛に遊び、業
 を洪園翁に受け、別に見解を建て、講筵を兩晉町に開く、
 倚才博識、經史を暗誦して、義理分明なり、今日の俗儒
 の及ぶ所に非らず、其の著書、鷄林情盟、博遊漫載、助語審
 象、既に刊鏤を経て、世に多く流傳す、性亦た詩を好む、余
 が長崎に遊ぶを送るに云ふ、出日輝を逐ふて、奥より
 臻り、更に月脚を追ふて、崎鎮に向ふ、風に梳り、雨に沐す
 三千里、羨む汝が鞋踪の兌震に跨るを」と、此の時に
 當りて、余は崎陽に知己なし、翁は乃ら尺一を與へ、轉じ
 て以て崎陽に客たらしむ、書中に云ふ、詩山は性詩文を

性嗜詩文、涉獵經史、請諸士留聽講義、於是
 羈寓數年、衣食不匱、又得盤纏資、皆翁之賜
 也、歸路重訪翁、翁復留余曰、竹履二儒、既已
 物故、浪華無人、子其揭旗幟、鳴鼓諸生、余歸
 鄉思、勃然不止、遂約再會而去、留別云、橘翁
 誘我浪津涯、教導諸生更下帷、不耐秋風黃
 葉節、乍振袂去、只留詩、又橘園者、朝鮮學士
 所贈于翁之號也、余戲呈一詩云、曾與鷄林
 鬪筆時、橘園名號贈來奇、慕君猶比江南菓、
 懶癖全將酸味醫、橘翁月下小酌云、妻奴賞
 夜擁余環、也寵麴生勞、待鬢松影抹、筵祛不
 去、何嫌月姊笑、酡顏操觚之風儼見、本相然
 其詞氣溫潤、亦可能誦、蓋翁之爲人、質直謙
 讓、實君子儒也、余嘗所師友者、去、今將數十

嗜んで經史に涉獵す、請ふ諸士留めて講義を聴けと、是
 に於て羈寓數年、衣食匱しからず、又た盤纏の資を得た
 るは皆な翁の賜なり、歸路重ねて翁を訪ふ、翁復た余を
 留めて曰く、竹履の二儒は既に物故し、浪華に人なし、
 子其れ旗幟を掲げて鼓を諸生に鳴せと、余は歸郷の思勃
 然として止まず、遂に再會を約して去る、留別に云ふ、橘
 翁我を誘ふ浪津の涯、諸生を教導して更に帷を下すを、
 耐へず秋風黃葉の節、乍ち袂を振ひ去て、只だ詩を留む
 と、又た橘園とは朝鮮學士の翁に贈りし所の號なり、余、
 戲れに一詩を呈して云ふ、曾て鷄林と筆を鬪はすの時、
 橘園の名號贈り來りて奇なり、君を慕ひて猶ほ比す江
 南の菓、懶癖全く酸味を將て醫す、橘翁の月下小酌に
 云ふ、妻奴は夜を賞し余を擁して環る、也た麴生を寵し
 て待鬢を勞す、松影を抹して祛ども去らず、何ぞ嫌は
 らん、月姊の酡顔を笑ふを、と、操觚の風儼として本相を見
 はず、然れども其の詞氣溫潤にして亦た能く誦すべし、
 蓋翁の人と爲り、質直謙讓にして、世に君子儒なり、余の
 嘗て師友とする所の者、今を去ること將に數十年ならん

年、近有東來者曰、翁既就木、余愴然自失、嗟天若假年、其著詩文集、諸注解、層見重出、可必期矣、錄以存希世之名士。

琴希聲、字廷調、號春樵、近江人、壯歲挂冠、以經術下帷京師、生徒滿門、性本嗜詩、善屬文、繡梓行世、總若干卷、隆名轟三都、宿松靈山房云、一宵幽夢乍醒初、測水聲中杜宇呼、簞笠將歸歸不得、滿山煙雨綠模糊、阿漕浦云、佛燈一點影淺闌、海風吹腥飛雨寒、想得當年如此夜、孤舟提網上空灘、歸省台麓、誦王昌齡秋在水清山暮、蟬句爲韻、予得水山二字云、琴牀石古青苔美、想起當年彈綠綺、舊夢不歸人老來、餘音只有前溪水、舊棲無恙占清闌、倦鳥有時空自還、壯大水聲涼滿谷、

とす、近ごろ東來する者あり曰く、翁は既に木に就くと、余愴然として自失す、嗟、天若し年を假さば、其の著詩文集、諸注解、層見重出すること、必ず期す可し、錄して以て希世の名士を存す。

琴希聲、字は廷調、春樵と號す、近江の人なり、壯歲にして冠を掛け、經術を以て帷を京師に下す、生徒、門に滿てり、性、本と詩を嗜み、善く文を屬す、繡梓して世に行はる、總べて若干卷なり、隆名は三都に轟ろく、松靈山房に宿するに云ふ、一宵の幽夢乍ら醒むるの初、測水聲中に杜宇呼ぶ、簞笠將に歸らんとして歸り得ず、滿山の煙雨、綠模糊たりと、阿漕の浦に云ふ、佛燈一點影淺闌たり、海氣腥を吹きて飛雨寒し、想ひ得たり、當年此の如きの夜、孤舟網を提けて空灘に上る」と、台麓に歸省して王昌齡の「秋は水清に在り山は暮蟬の句を誦して韻となす、予は水山の二字を得、云ふ、琴牀石古りて青苔美なり、想ひ起す當年綠綺を彈せしを、舊夢歸らず人は老來す、餘音は只だ前溪の水のみ有り、舊棲恙なく清闌を占む、倦鳥時ありて空しく自から還る、壯大の水聲、涼、谷に滿ち、老蒼

老蒼秋色日傾山、風致清妙、老鍊可愛、余曾寄呈七絕一首云、歷歲期君離世、事東游再越函關、墨江風月煙波上、共放漁舟垂釣竿、翁又嘗蒙廣福王命、撰愚著漫游詩草序以贈、文云、其人性急才敏、言語喧噪、突突逼人、使人應答無暇、余寄一簡以詰其不遜、翁答書云、余性不諂、王公不長彊禦、只演述平生實事耳、請子勿尤之、其爲人、真率剛斷、頓堪感服、又春樵翁有賢弟、祝希烈、字廷耀、號星齡、亦讓世寓京、以業儒術、性嗜詩文、上木數卷、流布世上、星齡在近江之時、余偶訪訊、議論古今、頗至佳境、星齡示六言一首云、楓葉半江水冷、月升一帶煙霏、忽聞柔櫓伊軋、知是漁翁夜歸、幽閑清暢、有味可愛、可謂

の秋色、日、山に傾くと、風致清妙にして、老鍊愛す可し、余は曾て七絶一首を寄呈して云ふ、歷歲期す君が世事を離れ、東游して再び越へよ函關の嶺、墨江の風月煙波の上、共に漁舟を放ちて釣竿を垂れんと、翁又た嘗て廣福王の命を蒙り、愚著漫游詩草の序を撰して以て贈らる、文に云ふ、其の人は性急にして才は敏、言語喧噪、突々人に逼り、人をして應答に暇なからしむと、余は一簡を寄せて以て其の不遜を詰る、翁の答書に云ふ、余が性、王公に諂はず、彊禦を畏れず、只だ平生の實事を演述するのみ、請ふ子之を尤むる勿れと、其の人と爲り、真率剛斷、頓に感服するに堪へたり、又た春樵翁に賢弟あり、祝希烈、字は廷耀、星齡と號す、亦た世を讓り京に寓して以て儒術を業とす、性、詩文を嗜し、上木數卷、世上に流布す、星齡の近江に在る時、余は偶まゝ訪訊して古今を議論し、頗る佳境に至る、星齡六言一首を示して云ふ、楓は半江に落ちて水冷に、月升起て一帶煙霏す、忽ち聞く柔櫓の伊軋するを、知る是れ漁翁の夜歸るを」と、幽閑清暢、味

京地之聯璧也、余亦寄一絕云、飢渴荐臻二十
 十年、夢遊台麓碧湖邊、聞君近況詩文妙、一
 寸方心別有天、一別以後歷星霜、久絕無音
 信、星齡頃自製竹圖、題七絕、介山田法眼轉
 以寄贈、詩云、春雷昨夜駭癡龍、鱗起捎雲凌
 碧空、老去虛心何所賴、枝枝葉葉有清風、余
 亦賦一絕遙鳴謝云、千里通情贈惠珍、詩篇
 竹畫染紗新、書堂手酌三杯酒、認畫認詩爲
 故人。

眞名苞、字君茂、號海屋、阿波人、寓居京地、專
 講儒學、屬詩文、兼善書、且以文人畫、高名驚
 人、春夜云、光風綺月度、林頭花影溶、庭踏欲
 流、半夜玉人猶未寐、笛聲遙在水晶樓、清妙
 逼真、又題山水圖云、春寒花蕊未飛香、山氣

あり愛すべし、京地の聯璧と謂ふべし、余も亦た一絶を
 寄せて云ふ「飢渴荐りに臻る二十年、夢に遊ぶ台麓碧湖
 の邊、聞く君が近況詩文の妙を、一寸の方心別に天あ
 り」と、一別以後星霜を歴しこと久しく、絶えて音信なし、
 星齡頃ろ自から竹圖を製し七絶を題し、山田法眼を介
 して轉じて以て寄贈す、詩に云ふ「春雷昨夜、癡龍を駭か
 す鱗起りて雲を捎へ碧空を凌ぐ、老ひ去て虚心何の賴
 る所ぞ、枝々葉々清風あり」と、余も亦た一絶を賦して遙
 に謝を鳴らして云ふ「千里の通情贈惠の珍、詩篇竹畫紗
 を染めて新なり、書堂手づから酌む三杯の酒、畫を認め
 詩を認めて故人と爲す」と、

眞名苞、字は君茂、海屋と號す、阿波の人にして、京地に寓
 居し、專はら儒學を講じ詩文を屬し、兼ねて書を善くし、
 且つ文人畫を以て高名、人を驚かす、春夜に云ふ「光風綺
 月林頭を度り、花影庭に溶けて踏んで流れんと欲す、半
 夜玉人猶ほ未だ寐ねず、笛聲は遙かに水晶樓に在り」と、
 清妙真に逼る、又た山水の圖に題して云ふ「春は寒くし

自然經雨芳、繞屋千竿不虛設、幽人早課聆、
 鶯簧閑適隱者之趣、自然溢乎筆端、余一日
 訪儼居、呈一絕云、有神有肉供書法、不可書
 家無此書、珍重世間稀少筆、休將粗樸墜名
 譽。

北小路大學介、號竹窓、洛陽之儒、特心折洪
 圖翁之說、間亦有補翼、能發明莊子、屢吐奇
 說、又嗜詩文、買箋云、千疊青山萬頃湖、老來
 擬逐釣漁夫、今朝購得蒙茸綠、已覺此身登
 畫圖、從星使之東武、歸後作云、二月出都三
 月回、櫻花已謝、棟花開、可憐京洛好時節、日
 日興意數盡來、龜鼠觀花云、一川波影競紅
 霞、選杖蒼汀踏白沙、可羨歸來樹間鳥、滿身
 風露夜栖花、畫山水云、霜嚴山忽瘦、水涵岸

て花は未だ香を飛ばさず、山氣自然に雨を経て芳し、屋
 を繞るの千竿は虚く設けず、幽人の早課鶯簧を聆くと、
 閑適隱者の趣、自然に筆端に溢る、余一日儼居を訪ひ、一
 絶を呈して云ふ、神あり肉あり書法を供ふ、書家、此の書
 なる可からず、珍重す世間稀少の筆、粗樸を將て名譽
 を墜すを休めよと。

北小路大學の介、竹窓と號す、洛陽の儒にして、特に洪圖
 翁の説に心折し、間亦た補翼あり、能く莊子を發明し
 屢奇説を吐く、又其詩文を嗜めり、箋を買ふ者云ふ、千
 疊の青山萬頃の湖、老來擬し逐ふ釣魚の夫、今朝購ひ得
 たり蒙茸の緑、已に覺ゆ此の身は畫圖に登るを、と星使
 に從ひ東武に之く歸後の作に云ふ、二月都を出で、三月
 回る、櫻花已に謝して、棟花開く、憐むべし、京洛の好時
 節、日々興意に數へ盡し來ると、龜鼠に花を觀るに云ふ、
 二川の波影紅霞を競む、杖を選んで、蒼汀に白沙を踏む、
 羨むべし、歸來樹間の鳥、滿身の風露夜、花に栖むと、畫山
 水に云ふ、霜は嚴にして、山は忽ち瘦せ、水は涵れて、岸は

偏高來往幾多客、風威冷似刀、雪駕鶯云、綺襟素領伴、冰霜一隊可憐、鶯與鶯、深愛元聞相思鳥、雙飛忽下白雲鄉、瑤姿掩映蘆花底、篆跡有無琪樹傍、借問合歡機上巧、今朝應讓此殊相、亦俊才也、余嘗席上呈一絕云、七句以上老星霜、仍是容顏如截肪、一一折衷經籍說、高談時解智心囊。

梁緯字公圖、號星巖、美濃人、游曆諸國、今也、就居洛下、專鳴詩鼓於壇坫、頓奏凱聲於筆陣、其所著詩、已有甲乙丙丁若干集、前年寓江都玉池之時、題余東海道中詩云、鈴聲火影宵征處、店月橋霜早發時、何似向陽窓下臥、讀君東海道中詩、品調頗高、趣味特幽、可不謂詩中傑哉、余亦寄一絕云、美髯烏首老

偏に高し、來往幾多の客、風威、刀よりも冷かなり」と、雪駕鶯に云ふ、綺襟素領、冰霜に伴ふ、一隊、憐むべし、鶯と鶯と、深愛元と聞く相思の鳥と、雙飛、忽ち下る白雲郷、瑤姿掩映す蘆花の底、篆跡有無、琪樹の邊、借問す合歡機上の巧、今朝應に讓るべし、此の殊相に」と、亦た俊才なり、余嘗て席上、一絶を呈して云ふ、七句以上の老星霜、仍ほ是れ容顏肪を截るが如し、一一經籍の説を折衷して、高談時に解く智心の囊と。

梁緯字は公圖、星巖と號す、美濃の人なり、諸國に游歴して、今や洛下に就居し、專はら詩鼓を壇坫に鳴らし、頓に凱聲を筆陣に奏す、其の著す所の詩は、已に甲乙丙丁の若干集あり、前年江都の玉池に寓する時、余の東海道中の詩に題して云ふ、鈴聲火影宵征の處、店月橋霜早發の時、何ぞ似ん向陽窓下に臥して、君が東海道中の詩を讀むに」と、品調頗る高く、趣味時に幽なり、詩中の傑と謂はざる可けんや、余も亦た一絶を寄せて云ふ、美髯烏首の

詩仙落魄曾知命在天、五柳陰陰玉池宅、志懷高尚比前賢。

京師摩島弘、號松南、詩名頗高、又有篤學之風、棋云、山堂晚迎客、一局對寒缸、忽覺子聲重、溪頭宿夜雲、山行云、秋山奇絕處、隔在西方、探勝情未去、溪橋度夕陽、冬日偶題云、滿窓愛日透幽齋、些暖催人下小階、苦學十年成底事、手攜稚子拾松釵、白鶴歌、壽某誕辰云、東山天已曙、日氣若成雲、中有雙白鶴、皓羽刷霜葩、一鶴離松頂、一鶴息碧崖、飛者入青雲、息者啄松花、各從意所之、豈有升沈耶、有飛必有息、自然無所加、優游安此裡、可以養精華、我歌雙鶴詩、爲君祈福遐、聲調趣味、悉入清妙、名之有實、實之無虛、信哉。

老詩仙落魄曾て知る命の天に在るを、五柳陰々たり玉池の宅、志は高尚を懐ひて前賢に比すと。

京師の摩島弘は松南と號す、詩名頗る高し、又た篤學の風あり、棋に云ふ、山堂晚に客を迎へ、一局、寒缸に對す、忽ち覺ゆ子聲の重きを、溪頭に夜雲を宿すと、山行云云ふ、「秋山奇絶の處、隔て、水の西方に在り、勝を探るの情は未だ去らず、溪橋夕陽に度る」と、冬日の偶題に云ふ、滿窓の愛日幽齋に透り、些暖人を催して小階を下る、苦學十年底事を成す、手に稚子を携へて松釵を拾ふ」と、白鶴の歌、某の誕辰を壽するに云ふ、東山天已に曙け、日氣雲を成すが若し、中に雙白鶴あり、皓羽、霜葩を刷す、一鶴は松頂を離れ、一鶴は碧崖に息ふ、飛ぶ者は青雲に入り、息ぶ者は松花を啄む、各意の之く所に從す、豈に升沈あらんや、飛ぶ有れば必らず息ふ有り、自然にして加ふる所なし、優游、此の裡に安んじ、以て精華を養ふ可し、我は雙鶴の詩を歌ひ、君が爲めに福遐を祈ると、聲調趣味、悉く清妙に入る、名には實あり、實には虚なしと信なるかな。

平安儒家松本氏、號愚山、淇園翁之門也、四條納涼云、蘭麝香翻水晶棚、人凌歌吹海中、行、河傾月落誰知曉、兩岸紅燈數點明、七月十六日、東山寓目云、悲哉何處、占秋光、家送靈魂、逐晚涼、薪火滿山大文字、也、教青女試紅妝、句句真摹、出京華之妙、使讀者神魂飛揚。

中島規、字景寬、號機隱、亦京地之詩人、其陰稿既上、木、而趣意品調、心折宋風、五絕云、落日霜梢影、只成三兩叉、危橋駕空處、行客蹶飛霞、鴨東竹枝云、樓燈無影水聲饒、一片殘蟾照柳梢、小女十三能慣客、不辭風露送過橋、雪夜宿漁家云、蘆花被冷睡難成、阻雪枕頭多、旅情習步一灣纒、隔壁歸篙半夜碎冰

不安の儒家松本氏、愚山と號す、淇園翁の門なり、四條の納涼に云ふ、蘭麝香は翻へる水晶棚、人は歌吹海中を凌いで行く、河は傾き月は落ち誰か曉を知らん、兩岸の紅燈數點明なり」と、七月十六日東山の寓目に云ふ、悲しいかな何れの處にか秋光を占む、家ごとに靈魂を送りて晚涼を逐ふ、薪火滿山の、大文字、也た青女をして紅妝を試みしむ」と、句句真に京華の妙を摹出し、讀者をして神魂を飛揚せしむ。

中島規、字は景寬、機隱と號す、亦た京地の詩人なり、其の陰稿は既に木に上す、而して趣意品調は宋風に心折す、五絶に云ふ、落日霜梢の影、只だ三兩叉を成す、危橋空に駕する處、行客飛霞を蹶むと、鴨東竹枝に云ふ、樓燈影なく水聲饒し、一片の殘蟾柳梢を照す、小女十三能く客に慣れて、風露を辭せず送つて橋を過ぐ」と、雪夜漁家に宿するに云ふ、蘆花被冷にして睡成り難く、雪に阻する枕頭は旅情多し、習步一灣纒に壁を隔て、歸篙半夜碎冰

聲、嵐峽舟中作云、入溪、沿嶺極深澗、花斷松
蘿、園且閉、轉艇歸時更奇絕、香雲挾翠復舒
來、雪鴛鴦云、黃雲一朵是良媒、非夢非真匹
鳥來、六出空花粧六翮、奇寒粹氣結奇胎、虛
心守素孤鷗愧、雙瑞占豐獨鶴猜、物忌鮮明
元腐說、好夸高臥弄縵縵、詞氣平淡、纖尖巧
況使人爽然、余偶訪棕隱軒、呈七絕一首云、
陰朋來叩玉樓中、開戶眼明正面東、三十六
峯含積翠、讀詩高臥枕屏風。

京師學醫、字津木益夫、號昆臺、顧親炙老莊、
已有注解、又以俚辭譯傷寒論、錢梓行世、名
施海內、於是諸邦醫生、負笈而入門者、殆盈
數千云、某生偶齋傷寒論、諺解曰、此是昆臺
翁會所著者、余取閱之、其說諄諄益于治術、

の聲」と嵐峽舟中の作に云ふ、溪に入り嶺に沿ひて深澗
を極む花斷えて松蘿園ちて且つ開く、艇を轉じて歸る
時更に奇絶なり、香雲を挾んで復た舒に來る」と雪鴛
鴦に云ふ、黃雲一朵是れ良媒、夢に非ず真に非ず、匹鳥來
る、六出空花六翮を粧ひ、奇寒粹氣奇胎を結ぶ、虚心素を
守りて孤鷗愧ぢ、雙瑞豊を占めて獨鶴猜ふ、物は鮮明を
忌むと元と腐説、好し高臥に夸つて縵縵を弄す」と詞氣
平淡、纖尖巧況、人をして爽然たらしむ、余偶、棕隱軒を
訪ひ七絶一首を呈して云ふ、陰朋來り叩く玉樓の中、戸
を開けば眼は明なり正面の東、三十六峯積翠を含む、讀
詩高臥の枕屏風と。

京師の學醫、字津木益夫、昆臺と號す、顧はら老莊に親炙
して已に注解あり、又た俚辭を以て傷寒論を譯し、梓に
鏤して世に行はる、名海内に施けり、是に於て諸邦の醫
生、笈を負ふて門に入るもの殆んど數千に盈つと云ふ、
某生偶、傷寒論諺解を齎して曰く、此は是れ昆臺翁の
會て著はす所の者なりと、余取りて之を閱するに、其
の説諄々として治術に益あり、醫と爲る者は識まざる可

爲醫者、不可不讀焉、余未接芝眉、遙寄呈七絕一首云、編就傷寒說發明、蘇名今日洛陽城、蔡倫紙染陳玄墨、無脚無翎萬里行、昆臺亦次韻答謝云、才敏曾聞君聰明、錦脣繡舌壓江城、愧吾跛鼈駑駘質、何及漫遊自在行、後又寄贈愚著百人一首詩、則昆臺亦贈其所刻林和靖省心錄一本、互通交誼、余卽席走筆、題省心錄卷首、卻以寄贈、詩云、庶士離塵了一生、隱身幽境愛梅情、奇文警世省心錄、語氣薰人特絕清。

からず、余は未だ芝眉に接せざるも、遙かに七絶一首を寄呈して云ふ、編就て傷寒說發明す、名を轟かす今日洛陽城、蔡倫が紙に陳玄が墨を染めて、脚なく翎なく萬里に行く」と、昆臺も亦た韻に次して答謝して云ふ、才敏曾て聞く君が聰明を、錦脣繡舌江城を壓す、愧づ吾が跛鼈駑駘の質、何ぞ及ばん漫遊自在に行くに」と、後ち又た愚著百人一首の詩を寄贈すれば、則ち昆臺も亦た其の刻する所の林和靖が省心錄一本を贈りて互に交誼を通ず、余卽席に筆を走らして省心錄の卷首に題し、卻て以て寄贈す、詩に云ふ、庶士塵を離れて一生を了し、身を幽境に隱して梅を愛するの情、奇文世を警しむ省心錄、語氣人を薰して特に絶清と。

門人 久我玄隆 同 技
同 玄恭

詩山堂詩話終

日本詩話叢書

五二